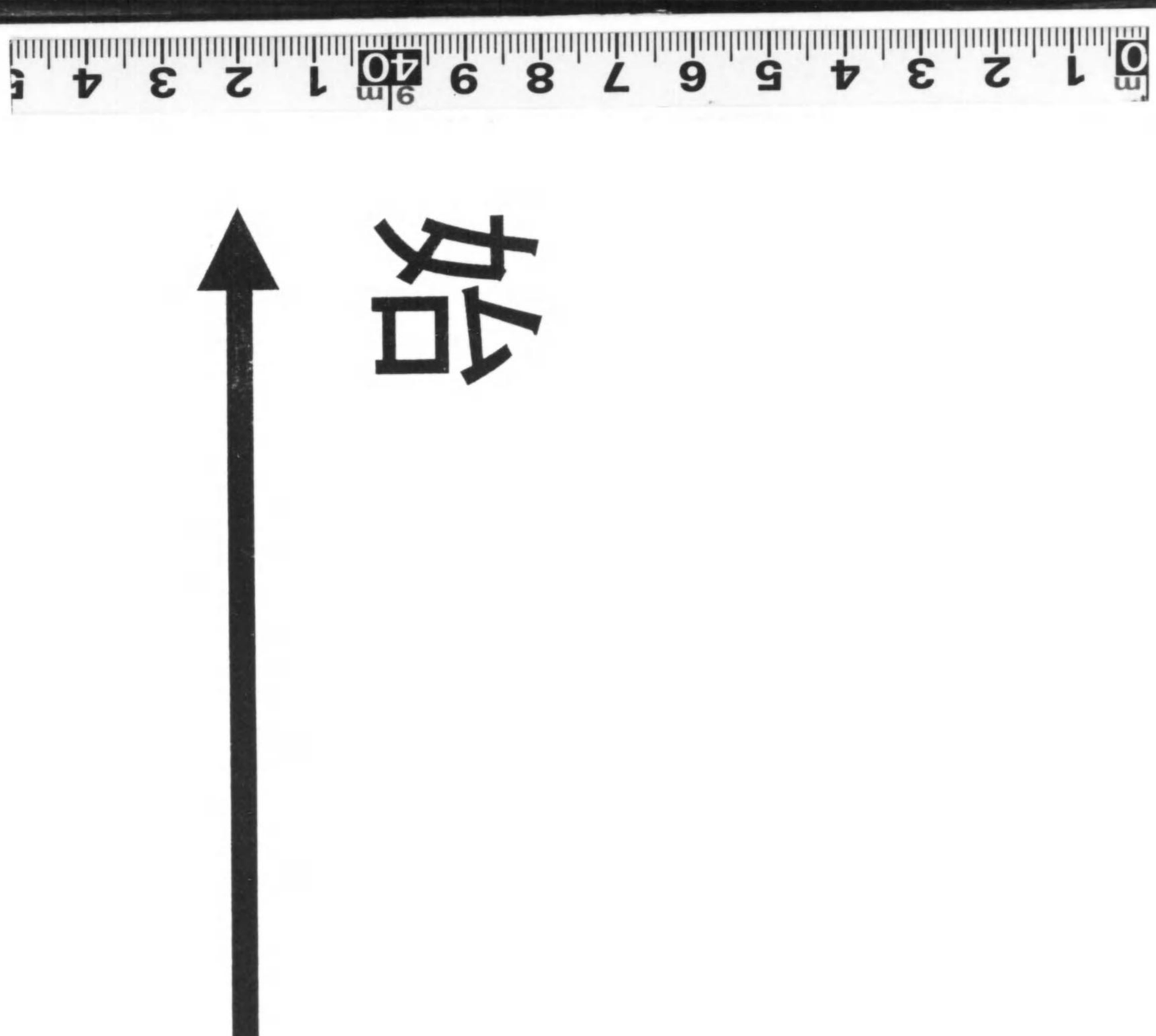
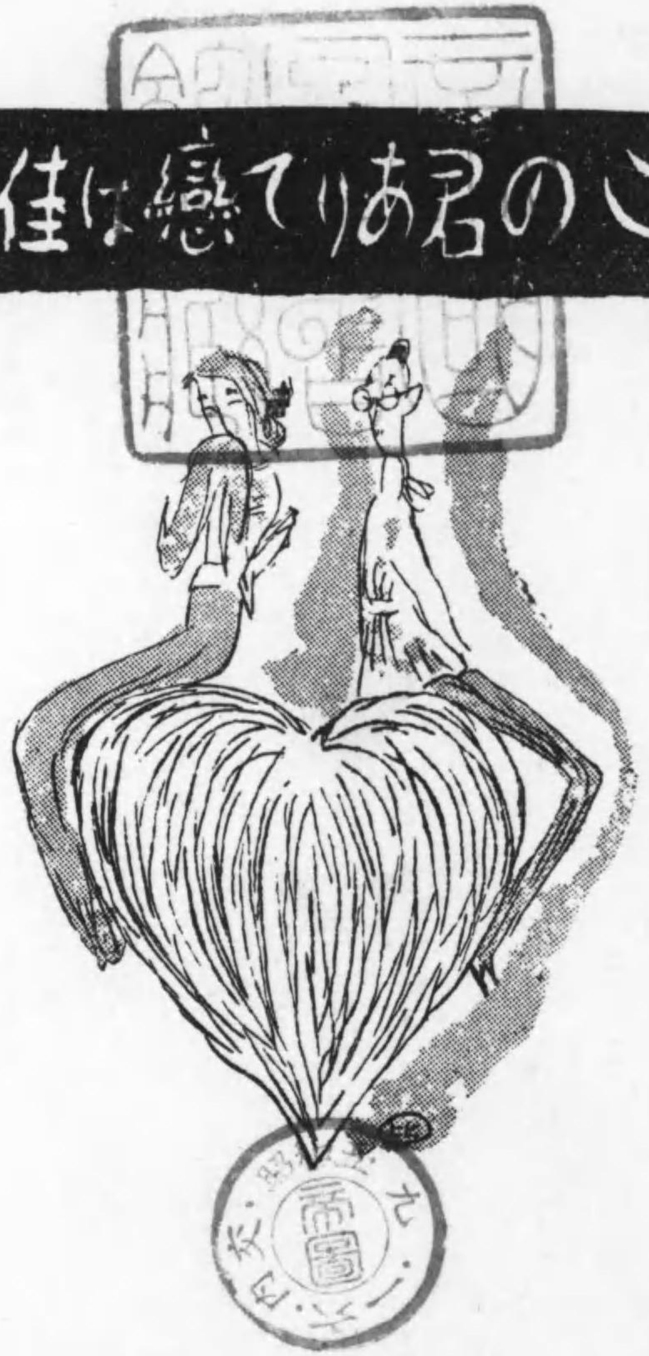


335
8/

特221
924

し住は戀てりあ君のこ



この君ありて戀は佳し

「あなた切符お買ひになったの？」

「どこの？」

「帝劇の」

「帝劇のなァに？」

「音樂會よ」

「ホッ、あの聖心學院主催の？」

「えゝ」

「また、君行くの？」

「わたし行くか何うか解らないですけど、切符を五枚ばかり頼まれてゐるの？　あなた被行る？」

「さア、何んともまた思ふてゐない」

「被行る樣でしたら、わたしの切符を買つて下さいな」

「あんまり面白相でも無いぢやないか」

「さうか知ら。でも隨分評判だわ」

「或は行くかも知れぬ」

「でもね、わたしの持つてゐる切符は三等よ、いゝ？」

「三等？　三等は御免だ、どうして一等二等を取扱はなかつたんだい？」

「一等二等は賣れ易いから、あなたには三等を賣つて貰ふと云つて三等切符を渡されちやつたの、困つたわ」

「三等ぢや……」と、己れは外ならぬ彼女の言葉であつたけど首を振つた。

彼女とはT嬢のことである。T嬢とは此麼事があると眞先に利用される有名な社交家のことである、且つ又己れと特別に懇ろな間柄なお嬢さんである。彼女は得る所なくして私から其の日別れて了つた。

音樂會は日曜の晝興行であつた。土曜日の晩に己れは明日の日曜は何うして日を暮らさうかと考へた。妙案遂に出ない。それぢや解らぬながらも耳を高尚にする爲めに一層暇つぶしがてらに其の音樂會へ出かけて見ようかと思ふた。その心になつた一つは己れの好きなT嬢の顏が見られると云ふことゝ、モ一つはいつか日曜學校大會に逢つた美しい少女が聖學院と云つてゐたから、聖學院とは聖心學院の略稱だと思ひ込んで、

若し略稱であつたら、あの眸、あの頰を再び見ることが出來るかも知れぬと云ふ希望が勤いたからである。

恰度左樣思ふた時、私は京橋を歩いてゐた、だから其の儘その足を帝劇の方向へと向けた。華かな明るい京橋の町から急に薄暗い横道に外れてスタ〳〵と歩いてると、急に一粒二粒雨が顏に灑いだと思ふ間もあらせず、ザヾッと一時に降り仕切つた。「困つたナ」とチエッと舌打ちしながら空を見上げた。闇と雲とで眞黑だ、直ぐ止み相でもない。己れはイソイソと歩き遂に小走りに變じた。雨はだん〳〵繁くなつて來た。帝劇までは未だ可成ある、こりや軒下に暫し踞むと云ふ醜態をさらさなくちやならぬのかと思ひつゝ適當な所をと物色しつゝ走つてると、恰度折よく前方へ十五六の少年が傘をさしながら歩いて行く姿が眼に付いたから、

突然その傘の中へ飛び込むだ。

「君濟まないけど、入れて呉れたまへ」

少年はッと顏を見た。

「え、どうぞ」と、幅廣く此方へ翳して呉れた。

「君、どこまで行くの？」

「日比谷まで」

「私は帝劇まで行くんだが……君濟まないが、帝劇の横から日比谷へ出て呉れないか？」

「えゝよう御座んす」

「どうも濟まんなア」

「いゝえ」

「本當に濟まぬ」と、二度三度厚く此の勝手な願望を申出たことに對して恐縮して見せた。少年は却つて其れを氣の毒がつた。そして自分は少々濡れても構はぬ此の未知の紳士の爲めにと許り傘を愈々此方へ大きく翳した。

「君、そんなことをしては」と、己れは柄を向ふの方へ遣る樣にして固辭した。そして、

「私はこの通り、オーバーを着てるから、首だけ入つてゐりやいゝんだから」と、無理に押遣つた。それでも少年は兎もすれば此方へ寄越さう寄越さうとした。私は名を訊いて置いて後に心ばかりお禮でも送つて遣りたいと思ひつゝッィうつかり其れを訊くのも忘れて了つた。

二人は暫らく默つて歩いた。その裡帝劇の横へ出た。

「有難う、助かつた、本當に有難う」

斯う云ひながら、ザッと降りしきる中を懸命の速力を以つて玄關へ走つた。

走り着いてから思はずヤレ〳〵とホッとする。息が暫らくヒイ〳〵した。外を見詰めると、にはか雨の爲めに避難してゐるのか、人の影らしいものが殆んど見當らない。たゞ自働車と人力車のみが横付けにされる許りだ。

呼息の靜まつた後で、己れは「それでは」と云ひながら切符を求めに入つた。

一二等はさぞ賣切れになつてるかも知れぬと心配しながら聽いて見ると幸ひ其の憂は無かつた、先づは來た甲斐があつた。

再び玄關に立つて外を見ると、相も變らず烈しい雨だ、眉に皺寄せて己れはヂッと暫らく雨足を睨む樣に見詰めてゐた。そして考へた。今こゝで客を下ろした車夫を呼んで其れに乗ると云つたら足元へ突け込んで法外な値段を吹ッかけるかも知れぬ。否それよりも第一車に搖られて大久保の自宅まで行くには少くも三時間は經過るだらう、それが厭だ。又自働車はと見れば皆タクシーで無い高等ものばかり、芝居見物から歸るとあるならいざ知らず、殆んど散歩がてらに單に切符を買ふ爲めに立寄つたんだから、その性質上から云つても何うしても自働車に洒々濟ましむと云ふことは出來得る業でない、恐らく何人と云へども此の事は敢て仕得ないことだらうと思ふ。

「あすこまで行けばいゝんだ」

斯う思ふて己れは馬場先門の電車停留場の赤い光を見た。あすこまで行けば電車に乗れるんだ、何うかして彼處まで行く方法が無いか知ら、一層一走りに走つて遣らうか知ら。すると此の自慢のオーバーが跡方もなくビショ〳〵になるであらう、それは我輩大に賛成せぬ。

こりや矢つ張り何うしても他人の傘の中へ飛び込むに限る？？　己れは俄かに決心した。さう決心するが早いか眼を皿の様にして其の方面行の通行者を物色した。誰も通らぬ、暫らく見詰めたまゝ身動きもしないで注意してゐた。

すると、折柄傘を傾けながら急いで通り過ぎて行く一人の娘がゐた。突嗟己れは飛び込むで行かうと思ふたが、急に控へた。それは相手が若い女である。それと知つて態と入つて行つたかの様に思はれるのが厭だつ

たからだ。モ一つは思はぬ大男が突然侵入したら、女は一人而かも妙齡屹度恐怖に戰くかも知れぬと云ふ遠慮からであつた。

己れは羨し相にヂッと見送つた。そして又誰か傘をさして來るかも知れぬと思ふて反對の方向を見た、生憎人一人來ない、賑かな夜の帝劇前としては珍らしい許りの淋さだ。あゝ己れはシテ見ると何時迄も茲に立つてゐなくちやならないかも知れぬと思ふて、よし何うあつてもあの傘を逃がしちや浮ぶ瀬がないのだ。とサッと閃めくが早いか、突嗟バッと娘さんの後から駈け出した。

追ひ付いて踞む様にして傘の中へ慌てゝ入ると同時に相手に恐怖心を起させない様にと逸早く、

「お嬢様、濟みませんが一寸そこまで入れて下さいませんか、甚だ恐

縮ですが」と叮重な言葉を發した。女は突嗟の侵入で驚いて振返へつた途端この言葉を聽いた。彼女はチラと己れの風姿を見た。そして大に安心した樣に、

「どうぞ」と、につこり笑むで傘を此方へと翳して呉れた。

「オヽ助かつた、どうも有難う」と、己れは先づ最初に禮辭を浴せた。

「いゝえ何う致しまして。急に降り出したので隨分お困りでしたでせう」

「困りましたね、實は帝劇まで切符を買ひに來た所、急にやられたものですから」

「アラ左樣ですか、私も今帝劇へ母を送つて行つたんですよ」

「ホッ、どうして氣づかなかつたのか知ら」

「正面にゐらしたんですか」

「左樣です」

「私し北側の入口へ行つたんですから」

「それなら氣付かぬ筈です」と云ひながら

「オヤお孃さま、もう來ました、どうも有難う御座いました」と云ひながら近くの停留場へ駈け出さうとすると、

「ぢや私し停留場へ電車が來るまでお入れしてゐますわ、で無いと此の雨ですもの」と一緒に來ようとする。

「いゝえ決して、もうそれあすこへ來ましたから」

「でも折角こゝまでお入りになつてゐらしたんですから。それにどうせ私も暇なんですから、決して御遠慮遊ばさずに」と、いたくも深切に云つて呉れるので、

「それでは何うか濟みませんが」

斯う感謝しつゝ停留場へ來た。

然るに來る電車も〳〵滿員又滿員、而かも夜の馬場先門で下りる人が無いと見えて、片ッ端から全速力で通過して行つて了つた。

「ヒドイわ」と、お嬢樣は恨めし相に見送りながら云つた。

「本當にお氣の毒ですね」と、何時迄も左樣して全で赤の他人たる私の爲めにヂッと立つてゐる彼女が可哀想になつて己れは左樣云つた。

「いゝえ私は少つとも構ひませんけど」と、飽く迄も深切だ。

又暫らく待つた。又しても滿員、又しても通過して了つた。

餘り氣の毒になつたので、己れは女に訊いた。

「お嬢樣、貴娘は孰方まで被行るんですか」

「私し？　私し京橋までです」

「どの方向です？」

「こつちの方」と彼女は指さして、

「京橋停留場のッイ近くです」

「ホッ、左樣ですか」と、己れは勢込みながら、

「それでは一緒に歩いて行きませうか、あのッイ近くに私の知つた所がありますから、そこで傘を借りますから」

「ぢや私も賑かで宜う御座いますし、電車は何うしても此の通りですから乘れませんからねえ」と、彼女も喜んで「それでは」と云ひながら車道を横切つて、洋館つゞきのセメント道路を肩を擦れ合ひながら歩いた。

「貴方は未だ學校へ行つてゐらつしやるんですか」

「えゝ」
「ぢや女學生ですね」
「えゝ」と、微に笑つた。
「學校は？」
「最初立教にゐましたけど、今○○女學校へ行つてゐます」
「○○女學校？　ホウ？始めて聽きますが」
「宗教の學校です」
「ミッションスクールですか」
「えゝ」
「ぢや貴娘はクリスチャンですか」
「まア左様です」

「まアが變ですね」
「でも仕方がないからクリスチャンになつてゐるんです、クリスチャンになつて了はなくちや先生に持てないんですもの！」と、正直なものだ。
「今の女學生の方は何麼本を讀みますか」
「本て？」
「小説か、小説みたいなもの」
「さうね」と、一寸小首を傾げながら、
「重に譯文か、さうですね日本人の方なら有島さんのだの他見男さんのだの」
「ホウ他見男さんの？」
「外の方は大概他見男さんのを讀んでゐますわ。でも私は譯書が大好き

ですからモンナヴァンナ見たいなものだの、ファウスト見たいなものだの。私の父や母は他見男さんの本をよく讀んでゐますのよ」

「ホッ」と、ニッと笑むで、

「私が他見男さんです」

「えッ」

彼女は思はずビタリと歩調を止めた、そして驚いて己れの顔を凝視した。

「まア――左様ですか、左様ですか」と、俄かに恥かし相にして、

「少つとも存じませず」と、急に堅くなる。

「意外ですか」

「意外ですわ、全く意外ですわ」と、それこそ意外な顔して、

「本當に奇遇ですわ、夢の様だわ、だつて今も母と他見男さんのことを

噂して歩いてゐたんですもの、どんな方だらうと話してゐたんですもの、家へ歸つて斯う云つたら母は驚くでせう、屹度オヤまア、と、屹度だわ。まア嬉しい、いゝお土産話が出來て」

と、大に勇み立つ様子が闇の中にもよく知ることが出來た。

「貴娘には御兩親がゐらッしやるんですか」

「えゝ」

「兄弟は？」

「兄と、それに弟と。……ねえ先生」と、急に言葉を先生に改めて何か言はうとするので、慌てゝ遮ぎって、

「先生は眞ッ平」

「ぢや他見男さん」

「ハイ、ハイ」

「オホッ」と、崩れて、

「矢つ張り御本の通りだわ」と、獨りでフキ出して、

「ねえ」と、此方を向いて、

「是非自宅へ遊びに來て下さいな、どんなに母が喜ぶでせうから」

「行つていゝでせうか」

「いゝでせうかつて、少つとも。隨分色んな方が遊びにゐらつしやるんですよ。一寸お知合になつた方でも。又お知合の紹介で突然にゐらつしやる方もあるんですよ。どなたでも見えるんです」

「すると貴嬢のお母アさんは非常に親しみ易い性格を持つてゐらつしやる方ですね」

「さアどうでせうか、それは私に解りませんけど」

「いや、どこか惹付ける力のある方に定まつてゐる。眼のいゝ方ぢやありませんか」

「そんな事私し氣付いて母の顔も見てゐませんけど」と、笑みながら、

「或は左樣かも知れません」

「交際家らしいですね」

「そりや交際家ですよ、どなたとも直ぐ仲よくなつて了ふんですもの……だから直ぐ馴れ〳〵しく家へ遊びにゐらつしやるんですよ」

「どんな階級の方です、それ等の人は？」

「大學生もゐれば高商や外語の方も、紳士の方も、色々ですよ」

己れは又しても例の好奇心が動いてきた。急に母と云ふ人が見たくなつ

た。

「ぢや一遍いづれ行きます」

「えゝ、是非どうぞ、本當に不思議ですわねえ」と、全く不思議にした。

いつしか鍛冶橋を渡つて京橋の停留場近くへ來た。

己れは少くも雨から助けられたと云ふことゝ今一つは彼女の心からの深切に對して、すこしばかりの禮ごとでもして見たい氣がした、そこで、

「ねえお嬢樣、若しお差支へなかつたら、その角でコーヒーでも飲んで行きませんか、好きですか」

「いゝえ決して其麼事をして頂いては」と謙遜する。

「差支へますか」

「いゝえ、でも」

「ぢや一寸だけお寄りになりませんか、お暇なら」

「でも其麼事して頂いては」と、猶も氣の毒がつたけど、遂に「それぢや」と嬉し相に隨いて來た。二人は角から直ぐ近くのコーヒ店へ入つた。そして一隅に座を占めるが早いかボーイにコーヒと菓子を命じた。

「本當にお蔭ですつかり助かりました。少つとも濡れずに濟みました」

「どう致しまして」と、却つて恐縮の體で彼女は受けた。

先刻まで薄暗い所ばかり歩いてた故か、少つとも彼女そのものに就いて知ることを得なかつたが、今眼のあたり明るい電燈の下に向ひ合つて親しく顏を見合はすに及んで總てを明白させることが出來た。

第一何んと云ふ色白さであらう！　それに眸は大きい裡に理智の光が輝いてゐた。鼻も高いが、殊に口元のあたりが云はれぬ可愛いさを漂はし

てゐた。頭の結ひ方から顔から何んとなく混血兒を見る樣な一種の美しさを持つてゐた。身體全體微塵も肉感的な所がなく、全で物云ふ大きな西洋人形の樣な可愛ゆくて可愛ゆくて堪らぬ風情を備へてゐた。私の印象は素敵に嬉しかつた。

ボーイは命じたものを運んで來た。

「貴嬢の着物の柄は素敵ですね」と、己れは上から下まで見下ろしながら云つた。

「アラ」と、驚いて、

「男の方から此麼事云はれたの始めてだわ、そんな所まで御氣を附けなさるんですか」

「近頃覺えました、女の美醜は着物の柄に依つて左右せられるものだと

ツクヅク氣が附きました」

「そんなに良い柄でせうか」

「そりや、もう」と、笑みを含みながら、

「誰方が選ぶんです、お母アさま、貴嬢？」

「母です」

己れは其れを聽くと、そのお母アさんは先刻からの話と云ひ、又この選び方から押して現代的の人だと云ふことを推量することに難くは無かつた。

「貴嬢の學校はミッションスクールなら皆麼品行方正でせう、戀のこの字も云ふ人が無いでせう？」

彼女はにこ〳〵して口元を見詰めてゐた。

「何うです、左様でせう？」

「そんな事はありません、仲には矢っ張り……」

「そりや左様でせうね、神は愛だから」

「まさか其麼事もないんですけど、だって若いんですもの!!」と、戀は若人のものと云はむ許りの高唱を見せて、

「隨分色んな方がゐるんですよ、ヤレ誰彼さんと誰々さんと怪しい縁だとワイ〳〵云ふ人に限つてソッと戀をしてゐるんですよ、そして自分が天つ晴れ模範生みたいな顔してゐるんですもの、にくらしいわ」

「一體貴嬢は戀をしたことがありますか」と、ソロ〳〵己れ獨特の痛烈な質問が出始めて來た。彼女は之を訊くと何故かニッと笑つた、そして何んとも云はれない。

「ありますか？」

更に訊いた、また笑つてゐる。

無いと云へば嘘を云ふことになるし、あると云へばオヤ〳〵と思はれるだらうし、こりや何も云はぬ方がいゝと許り、彼女は斯うした方法を採るより外に手段が無かつたらしい。あるんだナと思ひつゝ、己れは之れ以上追窮するのは殺生だと一先づ其の鉾は素直に收めて了つた。收めながら此麼ほんとに人形の樣な身體の中に矢つ張り戀を宿してゐるのかと少々〳〵可笑しくなつた。イヤ自分の若い時の戀の相手のことを考へたら、可笑しいこつちやない、この時代の戀が一番樂しく一番面白いものだ。さぞ嬉しいこつちやろなア。

「先生、私の極く仲のいゝお友達に斯う云ふことがあるんです、その方

は貫山さんと云ふ方ですが、貫山さんが毎日虎の門で乘換する時に必ず自分の顏をヂッと見詰めてゐる品のいゝ中學生がありました。そして歸りにも亦必ず其の中學生の姿が屹度見出されました。そんな日が可成續いたのです。

或日貫山さんが家へ歸つて來ると、一通の見馴れぬ手紙が机の上に置いてありました、オヤ誰方からか知らと披いて見ると、貴孃は毎日虎の門で斯う〳〵した中學生を見受けられるでせう、私は其男です。私は本當に貴孃を初めて見た日から何麼に戀をしたか、それからと云ふものは毎朝、毎歸り、必ずあすこで貴娘をお待受けしてゐました。貴娘の姿を一目なりと見ないと、何うしても學校へ行く氣もせず、又家へかへる氣にもなれませんでした、どうか私の心を汲んで交際して下さいませんかと

書いてあつた、外に隨分熱烈な文句が並べ立てゝ有たんです。貫山さんは最初の間は返事も何も出さずに置いた所、それから毎日の様に手紙が來るのみか、相も變らず熱心に待ち設け、果ては歸りにはズッと貫山さんの家近くまで電車で見送り、それでも飽たらで遂に自宅の門の前まで見送り、朝は又早くから近所まで來て其れとなく迎へて下すつたのです。その熱心に絆されて、いつか二人は言葉を交はす様になり、遂に貫山さんからも三度に一遍位は返事を出す様になつたのです。漸次昂じて中學生は貫山さんに是非結婚してくれと强請んだんです。

所が其の中學生は石尾(假名)と云つて御存じでせう、日本一の〇〇會社の重役の令息で、お宅には幾百萬の財産がおありになるんです、貫山さんの方は其れと比べものにならないんです、で貫山さんは其麼身分のか

け距つたものが結婚して果して幸福か何うか、非常に悶へてゐらつしやるんです。私共は返事に困つてゐるんです。先生は何う御判斷なさいますか」

「一體その中學生て幾歳なんです？」

「十八だ相です」

「十八で結婚の申込みをしたんですか」

「左様です」

「そして學校は？」

「〇〇中學を四年で修業して、一高の入學試驗を受けたんですけど、駄目なんでした」

「それで？」

「で今五年生になるんです」
「石尾て日本で有名な石尾徹さんでせう、あの人の令息ですね」
「左様です」
「女の方は？」
「そんなにいゝ家庭でも無いんですけど、惡くもないんです。でも比べものには兎ても」
「女の方は幾歳です？」
「矢つ張り十八です」
「フーム」と、一寸コクリと首を傾げて、
「なアに考る必要は少つともない、斷つて了へばそれでいゝぢやないですか」

「所が何うしても斷わり切れないんです」
「何うして？」
「若し斷わつたら家出すると云つてるんです」
「家出？　まさか」
「所が本當なんです。現に一高の入學試驗に落ちたのも其の心配からです。そしてもう學校も厭になつたから止める〳〵と云つてゐらつしやるんです」
「止めるもんですか、そんな事口で云ふ許りで」
「そんな簡單な戀ぢやないんです、實に大變なんです。それで或日いつもの通り自宅まで送つて、門の前で貫山さんと泌々その日も別れを惜しむでゐる所を折惡しく貫山さんのお母アさんに發見されたのです。お母

アさんは貫山さんを突如強く呼んで何うしたんです？　と訊いたんです。貫山さんはドギマギして答ふる業を知らなかつた所、兎に角どんな譯で二人が其處に立話をしてゐるのか知らないか、そんな所で醜いからまア其の方にも家へ入るやうに仰しやいと二人を中へ入れ、中學生だけは二階の客室へ先づ上げて置いて、貫山さんを別室へ呼んで、お母アさんは事の仔細をたゞされました。貫山さんは有の儘を答へました。するとお母アさんはまアと仰天して本當にお前は全つきり子供の樣に思ふてゐた所、何んですかまアと呆れ果て、さて二階へ上つて其の中學生に懇々と說諭されました、中學生は默々として一言も答へず、その儘歸つて了ひました。それでもう貫山さんを諦めたかと云へば決して左樣でなく、益々以前にも增した戀心を以つて貫山さんの影を追ふたんです。それと

知つた母親はこりや放ばらしにして置いては何麼事になるかも知れぬと思ふて、兎に角先方の親の方へ御注意申上げた方が萬全の策だと電話で此の旨を通じたんです。所が先方では御戯談でせう、家の子息が其麼馬鹿な事を、全つきり子供ぢやありませんか人違ひでせうとテンで相手にしなかつたんです。それでも違ひませんと云つても承知なさらないんです。餘り剛情に仰しやいましたので、貫山さんのお母アさんもムッとして自ら出掛けて行つたんです。そして先方の母人に逢つて詳しく事の一切を申上げたんです。それでも家の子供がホホと兎ても納得なさらないんです。それぢや之れまで頂いたお手紙を御覽に入れませうと、翌日先方から來た執事に今までの一切を提供なすつたんです。すると成程家の子息の筆蹟には違ひありませんけど彼の子が何うして此麼

事をと矢つ張り信ぜられなかつたんです、それほど其の中學生は坊ちやんで又をとなしかつたんです。先方では到頭矢つ張り其れでは家の子に違ひなからうと漸つと納得されたんですが、實にお困りになつた相です。一途に叱り付けでもして自殺や家出をして貰つては世間の外聞もあり、又可愛い〳〵獨り子に過ちあつてもならぬし、さりとて子息の望む通り、女と結婚させるには餘りに双方に懸隔があり、第一年齢が年齢として正氣の沙汰に出來やしないと、それは〳〵青息吐息だ相です。そして若しや子息に親が此の事を知つたと解つたら、どんなに羞恥に打たれ、それこそ狂氣の一途飛んでもないことを仕出かして呉れてはと、默つて何も仰しやつてない相です。ですから中學生は親が此の事を知つてるとは少しも知らないんです、相變らず結婚の約束して下さい〳〵と毎日の様

に仰しやるんだ相です、貫山さんは親は不可ないと云ふし男は斯うも熱心に薦めるし、困り切つてゐらつしやるんです、先生何う答へて上げたら良いでせうか」己れは立所に明快なる返事した。

「十八位で女に夢中になる様な男は碌な男ぢやないと思ふ。殊に中學生なら今が最も勉强盛りの身體である。脇目も振らずに學問に突進する時代である。その頃で、その年齢で結婚呼ばゝりはシャラ臭い、沙汰の限りである、恐らく其の男は屹度頭腦が良くないに違ひない。又出來も惡いに違ひない。そんな者と結婚しては女の不幸である、身分が何の斯うのは第二第三だ、第一それが不賛成の根本だ。殊に君だち解るまいが其麼家庭の子息だと、後日社會に出る様になると、自然交際が廣くなり、その爲め多くの宴席、多數の藝者に接する機會が多い。そこでだ若し結

婚前はウント遊んだり藝者に迷ふたりしたものは結婚後存外堅い。何も知らずに結婚してから放蕩出したものが藝者などに夢中になり出したら始末に終へぬ、落籍して今の妻君を追つ拂つて後釜に据えると云ひ出すかも知れぬ、それとも又こつそり妾にして圍ふて置くかも知れない、金錢の不自由ない家庭には必ず此の悲劇がひそむでゐるのだ。

だから十八位にして早くも女の色香に迷ふ者は必ず屹度その徹を踏むに違ひない、そしたら妻として其れが快よいことであると思ひますか。そんな大きな憂悶を抱きながら一緒に暮してゐると云ふことは確かに傷々しいことだらうと私は思ふ」

「でも二人が何日までも〳〵愛が解らなかつたら？」

「そんな事は決してない、屹度變る、結婚は（戀愛の墓場）と誰れやら

が云つた通り、結婚して了へば始めの一年程は互に物珍らしさに夢中になつてゐるが、それからは本當に不思議な程お互の心がさめて了ふ。詰り其の物珍らしさが遺憾なく滿足されて了つて相手から何等の求む可きものが無くなるからである」

「でもよくお互が結婚してからも愛し合つてゐる方があるわ」

「それは確かにある、それは互が戀愛の心からでない、夫婦と云ふものの力で左樣らしく見えるのだ。又若し假りに愛し合つてるとしたら其れは貧しき人達に多い、何故かとならば貧しさものは外に慰安を求むるの資力がない、芝居にしろ何にしろ行きたい所へ充分に行けない、そこでツク〳〵二人は運命を喞つ、その爲めの共鳴が互を強く密着せしめるに過ぎないのだ。彼等にだから若し充分に資力を與へたなら男は忽ちにし

て酒に女に、妻たる女は忽ちに三越白木屋へと買物に出かけるだらう、詰り愛が外へ〳〵と逃げようとするのだ。富んだ者で仲よさ相に見えるのは屹度結婚後一年か二年までだ、恐らく三年と結婚前と同じい戀愛氣持ちを持つてゐるものはあるまいと思ふ。だから貴娘は屹度若い結婚當座の人だちの睦ましさを見て單に左樣云ふんでせう？」

彼女はヂッと考へた。

「左樣仰しやれば皆さんはまだ若い方達だわ」

「兎に角絶對に私は不賛成だ」

「然し何うしても二人は一緒になりたいと云ふんですか」

「左樣らしいんです」

「親は？」

「どつちも不賛成なんです。殊に女の方の方では身分が違ふと云つて堅く執つて動かないんです。

ねえ先生、愛し切つた者が結婚すれば幸福なんでせうか、それとも別に戀愛を感じないで結婚したら幸福なんでせうか」

「そりや勿論愛し切つた者が何等の支障なく結婚出來たら其麼滿足はありません」

「ぢや其の方だちは一緒になつたら幸福でせうね」

「支障なく出來たら。でも親が何んとも云はぬと云ふ障害物があるぢやありませんか」

「ぢや若し親が承知することになつたとして、その身分の懸隔のことが何うなるでせう」

「左様ですな、若し左様なつたら愛し合つた二人は何も思はぬか知らないけど女の方の親は始終先方の親に對して氣苦勞を重ねなくちやなりません、親としては其麼氣苦勞の要る所へ嫁つて却つて心配が增して來る樣なものです。先方の親が百萬遍も是非お宅のお孃樣を〳〵と日參して貰ひに來るのだつたらいざ知らず、で無い限りは斷然おことわりするんです。左樣でせういざ罷り間違へば、ぢや何故あんなに厭だと云ふたのに無理に欲しい〳〵と云つてゐらつしやいましたと充分に此方が文句が云へるぢやありませんか。

兎も角だ、十八位の男がワイ〳〵結婚だ家出だと騷ぐ樣ぢや碌な者でない、頭腦が惡い、學校の勉强の代りに女の勉强ばかりしてゐるんぢや無いか。將來が今から案ぜられる」

「でも戀ですもの、純な戀ですもの！」

「純も不純もない、中學生が不可ない、十八が不可ない。然し本當に其れ丈け男が想ひ込んでゐるんであつたら、奬勵の爲め一高に入學なさることが出來たらと約束したらいゝ。私に云はすと屹度そんな頭腦ぢや入學出來得ないでせう」

「ぢや萬一出來たら？」

「今度は優等の成績で進んだらと云つたら何うです？」

「駄目だわ、そんなこと」

「駄目だらう、其う云つて諦めを見させるんです、男は屹度入學し得なかつた事を女に恥ぢると同時に、だん〳〵その爲め想ひも薄らいで來るでせう」

「何んでも其の男の方は來年家から洋行させると云ふことです。屹度親が心配して、左樣させたら氣が紛れると思はれたんでせう、で其の方は若し女の方貫山さんが歸國してから結婚すると云ふ約束を堅くして呉れるなら洋行するが、厭なら洋行しない、決して洋行しない、親が何麼に云つても洋行しない、と頑張つてゐる相です。で女の方も困つてゐるんですよ、女の方の親も困つてるんですよ、先方の親は子息さんが其れ程想ふてゐるんですけど、まさか餘りの懸け違ひの身分の爲め、お孃樣を欲いとも云へず、欲しいと云つたら將來何うしても貰つて遣らなくちやならないし、そしたら今度は親類仲間から何んだ年齢の頃もあらうに早やからふとか、何だ貰ふ所もあらうに其麼家の娘を、と寄つて集つて責められることが見える樣です。そして其の爲め嫁さんになつたものは屹

度色んな物々しい親類達から輕蔑と侮辱の眼を以つて見られるだらうと思はれるのです。

「どつちもですから云ひ樣のない立場にあるんです、それでゐながらも男は女に結婚の約束をと强請み、女も斷わり切れず、その愛にツイ〳〵引ずられて行つてゐるんです」

「もう二人はそれでは總てを許してゐるんでせうか、若し總てを許して了つてゐるんだつたら、それこそ重大問題ですから、厭でも應でも一緒にならなくちや。その結婚が幸福であらうが不幸であらうが」

「總てと申しますと？」

「女の貴重なる最後の一票を最早與へたでせうか」と、己れは云ひ難く相に云つた。

「そんな事はありません」

「でも解りませんよ、貴娘は見てゐないんですから！」

「見てゐなくたつて其れ丈けは大丈夫です」

「ぢや先づ安心でした、若しそれを與へてゐたら、どんなに女は不幸であつたでせう、貴娘にもよく注意して置きます、男から如何樣云はれようとも最後の一票だけは堅く〳〵守らなくちや不可ませんよ、それが女の寶ですから、一生涯再び得ることの出來ない貴重な寶ですから」

女は俯向いて聽いてゐた、恥かしい裡にも成程と云ふ强い教訓に感銘したのであらう。

「オヤもう大分時間が過ぎたらしい、もうお歸りにならなくちや不可ないでせう？」

「いゝえ、今日は何もしなくてもいゝんですから」

と、却つて先方の方がまだ話合つてゐたいらしく見えたけど、己れはさぞ彼女の家では何うしたことかと心配してゐるであらうと慮れたので、又何日か逢ひませうと云ひながら立上がつた。己れは若しまだ雨が降つてゐたら、向の家まで駈出して傘を借りようと思ふたが、ドアを隙して外を見ると、通行する人達が皆傘をすぼめて歩いてゐるので、もう晴れ上がつたんだナと知つた。

「貴娘は私を何う云ふ人間の樣に思ひましたか？」

歩きながら斯う訊いた。

「本當に初對面の方ですけど、何もかも打ち明けたい樣な氣のする人です、もうズッと〳〵舊くからのお知合の樣に思はれてなりません」

己れは自分に其麼力があるのか知らと、ほゝえまざるを得なかつた。

道々彼女は問ひに任せて家のことを語り、友達のことを云ふた。その裡、

「あらもうお別れしますわ、ツイそこですから」

「お見送りしませうか」

「いゝえ、もう、本當に結構ですから」

「雨も晴れましたから、また一緒に歩いて話して行きませう」

「濟みません、本當に濟みません」

斯う感謝して、肩が擦れ合ふ樣にして足を彼女の進むに任せて歩かせた。果物屋の横へ折れて二町ばかり。

「もう來ました、有難う御座いました」と、ピタリと止まつて彼女は挨拶しながら、

「是非お遊びにお出下さいませ、あすこですから」と、家を指示した。

「え、、屹度參ります」

「いろ〳〵御馳走さまに」と、白い顏がほゝゑみながら下げられた。

「ぢや左樣なら」

斯う云ひながら、私はスタ〳〵と素來し道へと戻つた、フと振返へて見ると、彼女はヂッと此方を向いてゐた。そして私が振向いた途端にニッと笑みを浮べて、最後の挨拶に代へながら、スーッと門の中へと消えて行つた。

私は歩きながら「流石は東京の女だ」と頷かざるを得なかつた。

己れは從前幾遍も云つたが、實にいつもながら東京の女はハキ〳〵してゐる、活潑である、同時に人を恐れない。このこと大に我が意を得てゐる。之が地方の女學生だとまるで差恥を見せることを處女の誇りの樣に過信してゐる、私は好かない。而して其の癖東京の女に限つて志操が堅い、地方の女は存外もろい相だ。よく田舍では東京へ行くと一二もなく墮落する樣に云ふが、その墮落するものは皆田舍から出て來る女學生のことだ、このことは確か私は何かの本で發表して置いた樣に思ふが、序でだから重複も厭はず改めて又書いて置く。東京の女には殆んど大概男のお友達と云ふものがある、戀人ぢやないお友達だ。それでゐて男と女でありながら戀に陷らぬから妙だ、飽く迄もお友達と云ふ觀念が強い。之が田舍だと先刻も云つた通り女に羞恥が強いからか友達が出來つこない、偶に出來れば屹度戀の關係がまつはつてくる。

東京の女は若しや其のお友達の中から戀人が出來たとしても、決して結

婚するまで或物を許さないと云ふ深い信念を持つてゐる。だから私は若い男や學生に結婚するなら東京者と結婚したまへと云ふことを口を酢ばくして勸めてゐる。田舍の女だと手が擦れ合つたり、握つたりするものならボーッとして咽喉に唾が無くなつて了ふ。所が東京者は其麼事は平氣だ、或物を許さない範圍のことは何んでも平氣でする、だから外から見たらオヤッと怪しがるが、いざ鎌倉といはゞ用心堅固である。

私は此の點に於て田舍に燻ぶるが如く育つたものより東京の女學生を極力推薦するに躊躇しない。何故かならば今後の世界は良人の社交的手腕よりも妻君に俟つ所が非常に多い。早い話が誰かゞ何處かの家庭へ遊びに行つたとする。「まアよくこそ」と晴れやかな顏して應對の勞を執つて呉れた方がいゝか、碌に物も云はずに笑顏一つせずに「ハッ」と畏まつ

た儘、お茶を持ち運ぶ丈けが關の山で、あとはウンともスウとも云はぬ方がいゝか、どつちがいゝと思ふ？　妻君つまり女が一人加はる爲めに座が何麼に圓滿に何麼に賑かになるかも知れない。歸つたあとで屹度何何君の家は面白い、愉快だと云ふことになる。そのことは畢竟何々君の評判をよくせしめるのだ。お茶をスッと持つて出てスッと消えたぢや味も氣もない、そんな家庭へはツイ他人が二度來るものは一度位に控へて了ふ。

この點に於て東京女は實に社交が旨い。人馴れしてゐる。應對が旨い。田舍の人は其麼のを見ると一二もなくお轉婆と云ふ言葉を浴せかけて了ふが、己れに云はせたらお轉婆ぢやないのだ開化けてゐるのだ、私は譯なく東京つまり都の者を好きなのは實にテキパキと開化けてゐるか

らだ。

妙子！　妙子！！　彼女は先刻貴娘の名はと訊いた時妙子と云つた。妙子！

彼女は確かに東京で生れ、東京で育つた者に違ひない。私は測らずも今日は美しい少女の友達を得たことを喜んだ。

○

その翌日水尾にピタリと出合ふと、彼は不思議だと云ひたげな顔して、

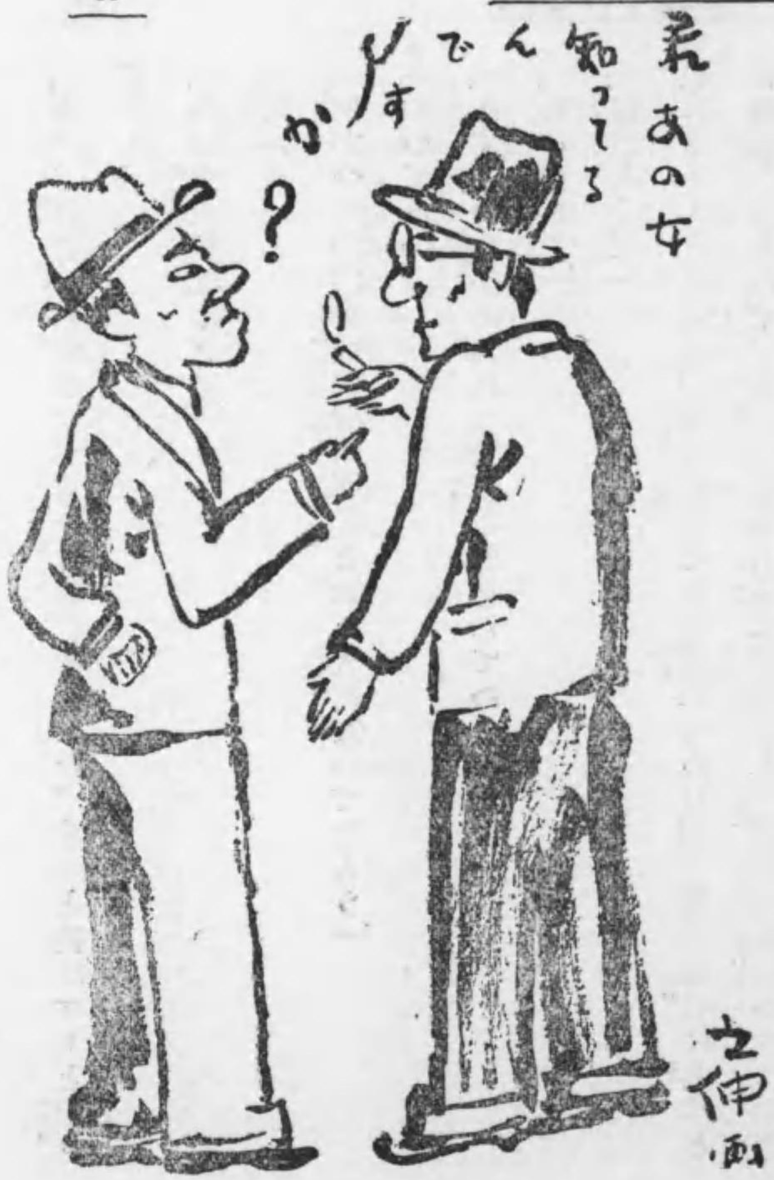
「君あの女知つてるんですか」と、訊く。

「あの女と云ふと？」

「昨夜君が一緒に歩いてた女さ」

「知つてると云ふ譯ぢやないが、一體どこで見たんだい？」

「電車の中から何氣なくチラッと見て、オヤと思ふたのさ」



「ホッ、實は」と云ひながら一什始終を話した。すると彼はフーと驚きながら、

「あの女大變なんだぜ」

「何が？」

「何がつて〇〇會社重役の石尾と云ふ人を知つてたらう」

「知つてる」

「あすこの息子と其れは熱烈な戀をしてゐるんだよ」

「あの女が？」

「猛烈なんだ」

己れはホーと思ふた、昨夜人のことに話してゐたが、偖は流石に其れと云ひ難かつたので、自分の友達と云ふ體裁にして己れに物語つたものと

見える。

「その話なら知つてゐる？」

「何うして？」

「昨夜話したから」

「ホー」と、呆れ返つて、

「初對面の君に早やから洩らしたのか、それで二人の仲も解るだらう？」

「いゝや自分の友達のことにして云つてたよ」

「フウ」と、笑つて、

「友達どころか御本人だから遣り切れない」

「でもあんな小さい身體してゐて、戀だ何だと騒ぐのかなア」

「そりや幾程身體が小さくたつて、十八だもの」

「油斷がならんねえ」

「油斷がならぬより當前だよ」

「一體二人の間は、どこまで進行してゐるんだい？」

「それは門外漢たる我々には解らない」

「一體君は何うしてあの女を知つてるんだ？」と、今度は此方から逆さに訊いた。

「實は僕の遊びに行く家へ彼の女もチョイ〳〵來るんだ、その關係で二三度逢つたことがある、隨分その中學生のことに就いて聽かされちやつたよ」

「ホウ、己れは隨分露骨に男のことを攻擊して遣つたんだ、惡かつたかナ」

「なアにウンと惡く云はなくちや、男が十八で結婚申込むなんて、而かも中學生が」

と、彼とても己れと全く同意見だ。

「それで誰が何んと云つても承知せぬらしい、だから其麼事は矢っ張り君みたいな世間に名の賣れた男が神妙な顏して聽かせた方が、存外利目があるのだ、今後ウンと說敎して遣りたまへ」と、奴さん何に腹立つたのか知らぬが、無暗と油をかける。己れも己れの意見と同じいことを彼が云ふものだから、ッイ乘氣になつて、

「よしッ、それなら其の積りで又話合つて遣るから」

「それがいゝ、本人の爲めだもの！」

二人は別れた。

○

己れはさぞ今日の音樂會にはT孃が來てゐるだらうと思はれたので、ッイ逢つて見たい氣にも唆かされてゐたし、それに此の妙子さんが音樂會へ行くか鶴見へ行くか孰方かへ私も參りますと云つてたから、或は來てゐるかも知れない、來てゐるとすれば益々淋しくないし、それに昨夜は何んとなく充分に彼女と云ふものを味はうことなしに別れた憾みもあつたから、今日は是非と許り、靜子(五歳)を連れて、開會少し前に帝劇へと出かけて行つた。

入りがけに野口君兄弟に逢つた、輕井澤で出來た若い友達である。

「オヤ」と云ふ表情で彼等二人は己れを見付けると、驚いて近寄つて來た。己れはニコ〳〵しながら、

「音樂會へ？」

「ハア」

「君等も隨分色んな方面へ顏を出すんだナ、好きなんだね」

「そりや、私共だつて」と、ニヤリと笑つた。

「一緒に入らうか」

「えゝ何卒、この方先生のお子さんですか」

「左樣だよ、もう此麼子供の所有者だからなア」と、感慨の一端を洩らした。彼等は唯何んとも云はずに笑つた。

「お一人限りですか」

「いゝや、ヒョッとすると知合の女が來てゐるかも知れないんだ、イヤ確かに來てゐる筈なんだ、若し來てゐたら紹介する」

「ハア是非どうぞ、お友達ですか」
「昨夜出來た許りの友達だ」
「ホウ何うして？」
己れは一切を話した。
「妙な緣ですねえ」と、驚いてゐる。
「それにもう一人ゐるんだ？」
「その方は？」
「それは大分先きからの友達だ」
「兎に角先生の女の友達に何麼方がゐるのか早く拜見したいものですねえ」
「まア入らう」と、靜子を併せて四人の一行は列を亂して正面から入つ

て行つた。それとなく廊下を物色したが、それらしい二人の姿が見えなかつた、それぢや開會間際に來るのかも知れぬと思ふて、正面玄關に向つて安樂椅子に撞つかと腰を下ろして入つて來る一人一人を見詰めてゐた。
まア何んと綺麗な人達が群をなして來るんであらう、若い美しい女性がきらびやかに着飾つて楚々として絶間なく遣つて來る姿のあでやかさ、見事さ。それのみならず、其等の中から自分の友達や仲間を見出さうとして廊下に立つ人々の之れ又美しさ。殆んど全で花の中にゐる樣な氣持ちであつた。
何時まで經つても遂に孰方の姿も見ることが出來なかつた。野口君兄弟を誘ふて若しや二階へでも來てゐるのぢやないかと二階へも上つて見た

が矢つ張り姿が見えなかつた。

その裡開會一時半の呼鈴が鳴つた、各自は切符の番號が違ふので、左へ右へと別れた。

私のボックスは一階の隅つこであつた、坐つて見渡すと、もう八分通りは女である、大方聖心學院の卒業生や在學生や或はそれ等の知己の爲めに切符は賣れたものと見える。さても綺麗な、さて〳〵美しい。

幕が上がると、右端から男女の二人の演奏者が現はれた。ピアノとバイオリンが始まつた。滿場は靜まつた。音は始まつた。

「父ちやま、ダンスは？」

己れは靜子を家から連れ出す時に、今日はダンスを見せて上げるからお出でと云つて誘ひ出したんだ。所が幾程見てゐても其れらしいものが現

はれないのみか、それに解り易い洋樂と違つて、我々が聽いてさへ何處がいゝのか惡いのか見當の附かぬものを何時までも鳴らしてゐるので、靜子ちやん大に不服と見えて到頭斯う切り出した。

「ダンス？　ダンスはね此處に無いの、鶴見にあるの」

「鶴見？　え？　父ちやま鶴見？」

「ウン　鶴見」

「それぢや鶴見へ行かうよ」

己れは驚く可き許りの高價な切符を買つた故からでもあらうが、入つて十五分か廿分も經たない先きに出るのが馬鹿らしいと思ふた、一面又こんな少つとも解らぬ音樂に解つた樣な顏して坐つてゐるのも、辛いことの樣に思はれた。それよりもT孃も妙子さんも孰方かゞゐると思ふたな

ればこそ、勇み立つて出かけて來たなれ、二人が二人ともゐないぢや兎ても辛抱してゐる甲斐がない、第一話相手がないと淋しいものだ。こんな場所には何うしても女の友達と云ふものは缺く可からざるものだに。それに昨夜の妙子さんが今まで待つてゐて來相でない所を見ると、確かに鶴見へ出かけて行つたに違ひない、妙子さんの話では私のお友達と一緒にと云つてゐたから、屹度妙齡の若い人達であるに違ひない。それ等の人に逢つて若い氣分を養ふと云ふことは私には好ましいことであつたし、又靜子の洋裝姿が又なく可愛いゝかつたので、同じ我が子が見られるなら斯うした美しい姿である時を見て欲しいと云ふ親としての欲望もあつたので、鶴見へ此の儘すぐ行かうかナとも思ふたが、何うも心が明白定まらなかつたので、靜子に「お菓子欲しくない？」と唆かしなが

ら、兎も角も廊下へ出た、廊下へ出た今一つの原因は靜子が四邊の靜けさを破つて時々大聲で「父ちやま、ダンスは？」と訊く聲が、他の熱心なる人々の耳を邪魔するのを氣遣つた點もあつた。

東洋軒の喫茶店で菓子やら果物やらコーヒを與へつゝ、さア何うしようかナと己れは頻りに考へた。若し鶴見へ行くんだつたら、早く行かなくちや舞踏が終つて了ふであらう、妙子さんは確か二時に始まる樣に云つてゐた、二時はもう間もなくの時間だ。それとも此處にヂーッとしてゐようか知ら。己れは二つの此の道を孰方を執らうかと惱むだ。到頭靜子ちやんの意見に依つた。

「靜子ちやんダンス見たい？」

「ダンス！　うれしいッ」

「鶴見は遠いよ」

「遠くてもいゝ？」

「遠いよ、此處にゐる？」

「だつて此處にはダンス無いんだもの」

「ぢや鶴見へ行く？」

「ウン、ダンス」

よし其れぢや鶴見だと己れは思ひ切つて立上がつた。

時間を見ると開會から出るまで僅かに廿二分しかゐない、何んと云ふ高價な犧牲の反面に女あることを思ふと、女の力て實に強いものだ、怖ろしいものだ。

○

有樂町から乘つて鶴見で下りた。何時もだつたら、ブラ〳〵と歩いて行つた方が却つて興味が多く、郊外散歩に持つて來いなんだけど、時間を見た所、最早疾くに舞踏が始まつてゐる樣に思はれたので、何んとなく氣が急いて、構外へ出ると直ぐ車に乘ることにした。

すると、此方と殆んど同時に、更に或る一人が車夫を呼ぶのを見た、何氣なく顏を見ると、歌人で有名なK氏だ。己れは來たなと頷きながら知らん顏してゐる。

その車の後から己れの車は續いた、靜子は久々で車に乘つた喜びからウンともスウとも云はぬ、餘ッ程感興が乘つてゐるらしい。

鶴見へ行つたものは必ず一通は嘗めさせられる經驗であるが、鶴見には踏切が二つある、間斷なしに汽車や電車や貨物車の來るために閉され

る、ポカンと立つてゐなくちやならぬ。あれが實に不快だ。

此の日も運惡く最初の踏切で、五分ばかり、後の踏切で七分ばかり待たされた。

それからそれへと續く汽車電車の爲めに容易に明けて呉れないからだ。

漸つと明けて呉れた頃には徒歩の連中が皆追ひ付いて了つた、斯うなると何んの爲めに車に乘つたのか解りやしない。

漸つと正門で下ろされて急いで入つて行くと突然靜子は何かに耳を澄したかと思ふと、

「父ちやま、お馬に乘りませう」と云ふ。

「お馬？　どこに？」

すると、一方を指さして、

「聞えるでせう、聞えるでせう」と云ふ。成程グワタ〳〵〳〵と消魂ましい音を立てた廻轉木馬だ。

「自動車もあるのよ、行きませう〳〵」とピタリと腰を下ろした。彼女は彼女の意見を通さうとする時必ず此の身構へする。

「ねエ靜子ちやん、お馬よりダンスがいゝでせう？」

「お馬がいゝ」と、取つて動かない。そして自ら握られてゐた手を振り解いて一散に其の方へと駈け出した。己れは追ッ駈ける樣にして後から

「靜子ちやんダンスの方がいゝんだよ」

「不可ないよ」と、ポンと振り飛ばされる。そして又も駈け出して行つた。

恰度その時K氏が何か道を迷ふてゐるらしく頻りに考へ込むでは右を見

左を眺めてゐた、ハヽア屹度舞踏場へ行く方向を求めてゐるんだらう。
それなら教へて遣れと己れはツカ〳〵と進んで行つて、
「貴方は舞踏場へ行くんですか、舞踏場なら今私が行きますから」と、
深切氣に云つた。
「いゝえ、實は今日は歌の會があるものですから、會場が何處か知らと」
「オヤ左様ですか、それなら」と、當が外れたので己れは一寸テレた。
「イヤ大變深切に」と、彼は懇ろに會釋した所へ、靜子が飛んで來て、
「ねえ父ちやま、いらつしやいよウ、よウ」と、手を引張りに來る。
「それぢや」と、K氏に別れながら、グルリと靜子ちやんの方へ向き直つた、其の時幸ひに一巡の廻轉が止むだと見えて、ピタリと音がとまつ

たので、
「オヤもう濟んぢやつた」と、仰山相にして見せながら、
「まア惜しいねえ、ぢや後で又動き出したら此方へ來ませうね。ねエ靜子ちやん今からダンスを見てそれから來ませうね、そして、ながーくながーくお馬に乘つてませうね」
「屹度ね父ちやま」
「ウン屹度」と、己れも我が子の前で誓言した。
「ダンスどこ？」
「このお山を上がるの」
「靜子ちやんお山へ登れるよ」
「ホウ、登つて御覽」

すると靜子ちやんは自ら先きになつてズン〳〵上がつて行く。あゝ之で漸つとお馬から放すことが出來た。

舞踏場へ行つて見ると、ホンの外人婦人二人と邦人の一人しか來てゐなかつた。ハテ怪しい、二時からあると云ふのに、而かも今日は舞踏大會だと云ふのに。己れは狐につまゝれた樣な顏して、ボーイに、

「今日はダンスが無いんですか」と、訊いた。

「あります」

「何時から」

「三時からです」

「三時？」

妙子さんは己れに確かに二時だと云つた。

「三時ですか、フーム」と、己れは何んだいと思ふた、そして女の一言を神の言の如く守り且つ信じて來たことが馬鹿らしくなつて來た。

「今日は大會があるんですか」

「いゝえ、そんなことは」

「ぢや普通の通りですね」

「左樣です」

之れ又なんだい、妙子さん愈々以つて怪しからぬ、己れは俄かにあの美しい顏が妬ましく眼の前へチラついて來た。時間を見ると二時半だ。來たからには仕方がない、もう軈て始まるだらうと諦めを付けて、兎も角も入る、外人の全で女王の如く構へたさらびやに着飾つた淑女が一日本紳士を相手に蓄音機に合はせて樣々に敎へ込んでゐたその態度が如何に

も端麗であつた、己れは少からず興味を覺えて見てゐた。

その女王は今度は妹らしいのを顧みて、二人でやつて見ろと眼で物云ふた、すると隅に腰かけてゐた金髪が立上がつた、それは姉と見違へるばかり無邪氣に且つ可愛さがあつた、二人は組むだ。そして踊つた。姉は其の樣子をヂッと見据えてゐた、時々不可ない、不可ないと立上つて來ては足を斯う云ふ風に手は此處にと叱り付ける樣な眼をしながら教へ込むだ、二人は虎の前で兎がダンスしてゐる樣にオヅ〳〵しながら踊つた。

それを暫らく見てゐたが、どうも人の來る氣配が割合に少ない、靜子がお晝飯を喰べないのでお腹が空いてゐるだらうと思ふて、棟續きの東洋軒の食堂へと連れて行く。

己れのお腹は喰べても喰べなくても孰方でも好かったんだ。子持ちになると自分よりか先づ子の腹の中を忖度して遣らねばならぬ、親と云ふものは有難いもンぢやろ靜子ちやん。

あれも厭、これも嫌ひと靜子め贅澤を云ふ哩、それでも漸つと納得させて喰べさせた。再び來て見た時には何時の間にか大分人が集まつてゐた、外人七分に邦人三分の割合だ。時間になると、オーケストラが始まつた、踊りたいものは此の時先づ踊つた。最初は形勢觀望と云ふ體でか、大部分は唯ヂッと樣子を見てゐた。踊つてゐる中に燃ゆる樣な派手な着物を着た二十四五の婦人がゐた、顏立の極めて鮮かな色の白い女だつた一生懸命に先刻の女王まがひから足取りを習つてゐた。この時某若宮殿下が二人の從者を連れられて觀覽に見えられた。場は一寸緊張して

來た。

オーケーストラが次第に感興を唆り出すと、淑女紳士は堪らなくなつて來たと見えて椅子から放れた、そして各自に相手を求めながら、男女の美しき群れは次第に樂に合せて踊り出した、斯う云ふことの好きな靜子は何時の間にかお馬のことも忘れて首も動かさず注視してゐる。

ワンステップからワルッへ、ワルッからフォックストロートへ、かれ等に漸次と踊りに熱狂し出して來た。

斯うした歡樂の踊りに見惚れてゐながら、己れは矢つ張り妙子さんのことが忘れることが出來なかつた。今も來るか早やも來るかと、時々思ひ出した樣に入口を眺めた、けれども遂に姿らしい姿を見出すことが出來なかつた。實に怪しい。

こりやヒョッとすると、私等が帝劇を出た後に遲れ走せながら、帝劇へ行つたかも知れぬ、で無くちや來ない筈はないのだ、若し帝劇へも行かず又鶴見へも來ないものとしたら、彼女は單に一種の虛榮上からあゝ體裁を作つたことを云つて見たのであらうか、若し左樣だつたら其れを信じた己れは返すゞ〳〵も正直と云ふよりも先づ自分の愚かさを嘲けり笑はなくちやならぬ。

兎に角腹の立つことだ。

到頭中途にして折角のダンスの興味も其麼事が頭腦に浮び出すと、いつもの樣な興が乘つて來なくなつたので、今度は此方から「靜子ちやんお馬の場所へ行きませう」と誘ひ出す。一寸一言云ふが、多くの人たちの中でダンスの出來なかつた者は他見男　んと靜子ばかりだつた。然し顏

付や服裝は充分にかれ等の輕侮か　免かれる程堂々たるものであつたから、彼等は屹度「あの人は子供を連れてゐるから、踊らないんだらう」と察して呉れるだらう位に自分で自分の都合のいゝ解釋に定め込んで了つて、揚々と靜子の手を引いて外へ出た。

山を下りて、廻轉木馬の所へ來ると、がう〳〵相變らず廻はつてゐた。暫らくヂッと見てゐて一廻轉終つた後に、

「靜子ちやん、どつち？　お馬？　自動車？」

流石に女の兒だけあつて、お馬に乘りたいとは云はなかつた。

「自動車。父ちやまも乘つて、ね？」

一人では心細いと見えて父ちやまもと來た、親父とは云へ、まだ充分子供氣たつぷりな己れは勿論之に應じた。

斯くして代を拂ひ、然して乘る。外に二三人あつた。

「宜しいか、廻はしますよ」と、番人が云ふが早いか機械のハンドルを廻はすと、俄かに廻轉仕始めた、馬鹿らしい樣だけど一寸面白い、靜子は眼を細うして喜んでゐる、屹度本物の自動車に乘つたと同樣な氣でゐるんだらう。

此處で充分靜子の滿足を買つた後で、

「もう之でいゝでせう、さ歸りませう」と、下りた。

「父ちやま、面白かつたわねえ」と、ピョン〳〵して見せる。

歸りは裏門へ廻はつた、出る時に靜子は受付から赤い旗を貰つた、どの子供にも子供なら與へるらしい、斯うして僅かのとこで子供の御機嫌を取る花月園は仲々に拔目が無い、子供が喜べば自然親父も嬉しい、從つ

て鶴見の花月園はいゝ所だとなる。遣り方が旨い哩。旗を見ると桃太郎デーと書いてあつた。

有名な總持寺を指呼の間に見ながら、ゆたり〳〵とステーションへ來る、電車は直ぐきた。

品川で下りて山の手に乘換へると、その電車は久々で快晴の日曜の爲めか乘客で凄まじき許りの滿員であつた、漸つとのこと車掌に押し付けられながら入る。人込みに押されてゐると、

「まアお嬢樣、可哀想に」と云ひながら靜子の頭を撫でる樣にして、自分の方へ引付けた一人の少女がゐた。

「イヤ有難う」と、己れはお辭儀しながら、釣革にブラ下かつて輕く禮を云つた。

その少女は立つてゐた、外に二人の連れがあつた、その二人は坐つてゐた。

澁谷まで來ると、立つてゐたのと、坐つてゐた一人は立上がつた、そして殘つた一人に「お氣を付け遊ばして」と云ひながら下りて行つた。

すると其の殘された少女は逸早く靜子の手を引いて、

「こゝへおかけなさい」と、他の客を逸早く制して云つた。己れは慌てゝ坐つて靜子を膝の上へ乘せた、そして「どうも有難う」とお禮した。

その少女は見るからに品位四邊を拂つてゐた、鼻筋のキリッとした眼元の凉かな、どこに難の入れ所のない顏であつた、屹度餘程いゝ家庭の御嬢樣に違ひない。

私は暇つぶしに靜子と色んな會話を始めた。

「靜子ちやん今日は何處へ行つて來たの？」

「鶴見」

「何しに？」

「ダンス見に」

「その前は何處へ行つたの？」

すると靜子は考へた。

「さア何處でしたでせう」と、コクリとしながら、忘れたと見えて、

「父ちやま、どこ？」

「帝劇」

「ていげき　さう、さう、ていげきだわねえ、帝劇で何してゐたのか知ら」

「音樂會」

「音樂會でピアノだわねえ、バイオリンだわねえ、それから父ちやま此麼大きなものがあつたでせう、あれなんでせう？」と、手を大きく擴げて見せる。

「セロ」

「セロ？」と、聽き返しながら、

「セロて大きなものねえ」と、思ひ出した樣に頷づく。

「靜子ちやん帝劇好き　鶴見好き？」

「鶴見」

「何故」

「だつて斯うして踊るんだもの！」と、妙な手付して見せる。その有樣

が如何にも滑稽だつたので、先刻から默つて見てゐた隣の少女は思はずニッと笑むだ。

その裡、少女は懷から何やら取出して讀み出した、見るとも無しに見ると、今日の帝劇のプログラムだ。オヤと思ふて、

「お孃樣は今日帝劇へゐらしたんですか」と、口を利いた。

「ハイ」と、細い明白した聲、前齒の白い齒が眞赤な唇からニッと覗いた。

「今濟んだんですか」

「えゝ」

「隨分遲くまでかゝりましたね」

「いゝえ、有樂町で大分電車を待つたものですから」

「面白かつたですか」

「面白いのか面白くないのか解りませんけど」と、あとは謹ましく口をつぐむだ。矢つ張り札を勸められたものと見える。

己れは再び靜子ちやんの頭を撫でながら、

「靜子ちやん、若し他所へ行つて迷子になつたら何うするの？」

「そしたらねお巡査さんの所へ行くの」

「ホー感心ですね、お巡査さんがお宅は何處と靜子ちやんに訊かれたら」

「中澁谷」

「それから？」

「西川靜子」

「いゝえ左樣ぢやないでせう、中澁谷の次にまた何かあつたでせう？」

「なんでせう？」

「八一六」

「八一六？」

「さう」

「中澁谷八一六西川靜子」

「まアお悧悋ね、お年齡は？」

「五ッ」

「靜子ちやん迷子になつたら泣く？　泣かない？」

「泣く」

「オヤ何故？」

「だつて母ぢやまが居ないんだもの！」

少女は此の時「まアなんて可愛いゝんでせう」と許り眼元を笑みで一杯にしてニコヤカに靜子の顏を見た。靜子は俄かに羞恥で慌てゝ顏を埋める樣にした。

少女の眞白い手は密つと靜子の頭に訪づれた、そして其の房々とした毛を撫でた。靜子は相變らず俯向いてゐた。

「靜子ちやん、今おつむりを撫でたのは誰れでせう？」

「父ちやま」

「いゝえ」

すると、ヒユッと擡げて四邊を見た、すると少女がヂッと其の顏を見てニコニコしてゐるのを發見した。

「誰れでせう靜子ちやん？」

「お姉ちやま」と、云ひながら又慌てゝ顏を隱した。

「どちらまで被行るんですか」と私は少女に訊いた。

「高田の馬場まで」

少女の答へは明白してゐた。

「淋しいでせう、あの邊は？」

「でも家は賑かな場所にあるんですから」

「それなら安心ですね」と、云ひつゝ、今度は又首を上げた靜子ちやんに、

「靜子ちやん、今からお家へ歸つて何するの？」

「御飯喰べるの？」

「御飯喰べてから？」

「ねんねするの」
「誰と？」
「母ちやまと」
「靜子ちやんおッ乳飲むんでせう？」
「……」
「飲むんでせう？」
「……」
「何故默つてゐるの？」
「……」
「まア大きな者がオッ乳飲むなんて、それ御覽、お姉さま笑つてたよ」
靜子ちやんは吃驚した樣に少女の顏を見た、少女はにつこり微笑した。

「ねえ靜子ちやん從前は飲んだけど、今夜からは飲まないんでせう」
「えゝ」
「屹度飲まないんでせう」
「えゝ」と、恥かし相に頷づく可愛さ。
その裡新大久保へ來た。
「さア下りますよ」と云ひながら立上がつて、少女に「お氣を附けてお出なさい」と云ふと、「ハイ」と叮嚀にお辭儀する。
「さ、靜子ちやん、お姉さまに左樣ならしないの？」
すると靜子は其れこそ見事なお辭儀を捧げる、少女は嬉し相に之れ又叮嚀に返した。斯くして下りた。
下りてからも私は近頃珍らしい許りの其の品のいゝ顏が何うしても忘れ

ることが出來なかつた、そして妙子さんやT嬢に今日は逢へない失望と慨みはあつたけど、此麼容易に發見することの出來ない少女を見たと云ふことで少からず其の憂悶を取り消すことが出來た、何日か又どこかで逢ふことがあるかも知れない樣な氣がした。彼女は屹度あの顏立から推して名ある家庭の令嬢に違ひない。その日は遂に暮れた。

○

次の日己れは一體妙子と云ふあの女學生は何麼家庭の令嬢であるか其れを見たかつた、そこで母が其麼開けた人であつたなら、却つて潔よく招じ入れるかも知れぬと思ふたので、先づ手ぶらで行くのも變だと云ふので、風月の栗饅頭を土産に買つて、若し不在だつたら馬鹿を見るからと、豫め彼女の歸校時刻を見計らひ電話をかけた、幸ひ電話口へ出たのは

彼女だつた。

「昨日帝劇へゐらしたんですか」

先づ然う問ふた。

「いゝえ」

「鶴見は？」

「いゝえ」

「オヤ可笑しいナ、先日帝劇か鶴見か孰方かへ行くと云つてたんぢやありませんか。私しそれで最初帝劇へ行つた所貴女の姿が見えなかつたでせう、それから、ぢや鶴見に違ひないと、鶴見へ行つて見たんです、矢つ張り姿がないんでせう、どうしたんですか」

「本當に濟みません」

「それに舞踏大會でもなく、又二時からでも無かつたですよ」

「あらッ、左樣でしたか」

「人が僅かしか來てませんでした」

「まア左樣ですか」と、彼女も意外に思ふたらしい。そして、

「全で私がすつかり嘘を申上げた樣で、困つちまいましたわ」

「何故來なかつたんです？」

「一寸用事が出來たものですから、本當に惡う御座いました」と、よもや私が鶴見まで出かけないだらうと思ふたらしい、それとも又鶴見へ行くなどゝ云つたのは昨日私が考へた通り單に體裁であつたのかも知れぬ、そんな事はまア何うでもいゝ哩。

「實はもう二時間程經つてお伺ひしたいと思ふんですが、御都合は？」

「まア左様ですか、一寸お待ち下さい」
母に相談したらしい。直ぐ又出て來て、
「是非どうぞ、お待ちしてゐますから」
「それぢや何れ」。
「屹度どうぞ」
程もなく私は菓子折ドげて、この前見送つて家を知つてゐたので、別に人に問ふまでも無く直きに解つた。
玄關へ入つて行つた、靴音で母らしい人が待ち構へてゐた樣に飛んで出て來た。
「まアよくゐらつしやいました、さア何卒」
よしきたと靴を脱ぐ、後から連れ立つて行くと、二階へ通された。そこ

には火鉢を眞中に二つの座蒲團が並んでゐた、チャンと用意して待つてゐたと見える、小綺麗な明るい部室だ。
「やア始めまして私が……」
「お初にお目にかゝります、先日は妙子が大變御馳走さまになりまして」
と、又しても機先を制せられた、己れは何日でも口が重いものだから、ツイ相手に先んぜられる憂がある。やられたナと思ひながら、
「いゝえ私こそ、本當にお蔭ですつかり助かりました、あの時若し入れて頂かなかつたら、それはもう濡鼠の樣になつたでせうに。今日は其の御挨拶に一寸あがつた樣な譯で」
最後の文句を己れは旨く云つた哩と思はずオホッとした、果して、
「まア飛んでもない御挨拶など、、却つて此方から上がらなくちや成ら

ないのでしたに、よーくまア被來つて下さいました、さア、さアどうかお敷き遊ばせ」と、云ひながら座蒲團を薦めて、一寸立つて行かうとすると、己れはサッと立上がつて、階段の上の隅ッこに置いた菓子折を取上げ、

「之はホンのお禮のしるしまでに」

すると、母は仰山相に「まアー」と云つた表情たつぷり見せて、

「まア此度事して頂いては、まア何うしたら好いでせう、却つて」

「いゝえホンの何んですから」と無理遣りに押し付けて了つた。先方だつて開けたら旨いものが飛び出すんだもの、まア〳〵と云つてるものの、〳〵めと思ふたに違ひない。

「左樣ですか」と、モジ〳〵して、「それでは折角のお志を無理にお斷

わりするのも」と、云ひながら、旨いぞ〳〵と云ふ様子は微塵も顔に出さず

「どうも有難う御座います、本當に却つて御心配かけて」と、云ひながら疊の上をツル〳〵と引張つた、屹度割合に重かつたので、餡がどつさりあるに違ひないと、見當を附けたらしい。己れなら思はず嬉しさにニンがりするんだけど、此の母君は修養が積んでゐると見えて萬事胸に收めて了ふ。

「それでは」と、其れを受取りながら階下へ下りて行つた、殘された己れは改めて座蒲團の上へ撞つかと座りながら、妙子さんは何うして顔を見せないんだらうと氣にした。ヒョッとするとお化粧を凝らしてゐるのかも知れぬ、己れは女の表裏はよく知つてるからお化粧位どうでもいゝ

のに早く來ればいゝ、お母アさんの皺くちゃの顔を見てゐるより、妙子さんの若い美しい華かな顔が何麼に待ち遠しいであらう。階段に音がしたので、さては妙子さんだナと妙にニコ〳〵して眼を大きく見開いて待つてゐたら、お母アさんだつた。コーヒを運んで來たんだ。彼女は座り、かけながら、

「妙子は何うしたんだらう？」と、思案氣に洩らしたので、己れは隙さずトボケた様な顔して、

「どこかへゐらしたんですか」

「ハア貴方のゐらつしやる一寸前にお友達を見送つて出たんですよ。そのお友達が他見男さんが、……オヤ他見男さんなどゝ失禮を。アノ奥野さんがゐらつしやると云ふことを先刻貴方からお電話を頂いた時に話し

たものですから、それぢや何麼方か是非お目にかゝつて行きたいと、たつた今しがたまでお待ちしてゐたんですよ、でもお約束の時間より少々貴方が遲れたので、それぢや沙汰止みになつたのかも知れぬ惜しい〳〵とお歸りになつた許しなんです。女の方ですもの餘りお歸りが遲くてはお宅へ濟みませんし、强ひてお留めもしなかつたんですよ。

その方を一寸そこまでと云つて妙子も一緒に出て行つたんです、然しもう歸るでせう」

女中が其の時お菓子を持つて來た。

二つ三つ話合つてる所へ、「どうも濟みません」と云つて入つて來たものがある、無論我が親愛なる妙子孃である、オー美しき哉その顔よ、若さ華かさ。

彼女は潘るゝ樣に笑みを口元に浮べて白魚の如き兩手を疊に輕くつけて

「ゐらつしやいまし、先日も色々と御馳走さまに。ようこそ」

己れも先日はと首を下げた。

「ねえ母さま素敵なトランプを貰つて來たのよ」

「まアあの方に」

「えゝ、お宅までお見送りしたの、そしたら私に好いもの上げませうッて下さいましたのよ、御覽、いゝんでせう」

「さう？」と、妙子さんが差出した其のトランプをチラと見た許りで、興も薄げに側へ遣つて了つた。妙子さんは何んとか云つて賞めて呉れても好き相なものをと許り憾めし相に母親の横顏を見たが、イヤ〳〵折角の來客の手前、そんな顏をするのは好くないと思ふてか、自分も進んで

更に其れを側の方へと退けて了つた。

「あの奥様、電話で御座います」

階下から女中が此の時呼んだ、母親は急いで立上つて行つた。

「妙子さん全く貴娘は美しいなア、素敵だ」と、笑ひながら云ふと、

「まア、さう云はれると何うしていゝか解らないわ」と、チラと己れの眼と眼を合すが早いか、恥かし相に嬉し相に急に落して了つた。

「でも私より奥様の方がズッとお綺麗でせう？」

「いゝえ貴嬢の方がいゝ」

「いゝえ不可ません、其麼事仰しやつてもチャンと知れ渡つてますから」

「知れ渡つてるとは恐れ入つたナ、うそだよ」

「いゝえ、それに他見男さんてお子供さんを大變可愛がる方ですつて！

左様ですか」

「それは事實です」

己れはもう誰の眼からも親父あしらひにされるのかとウンザリして了つた。せめて斯うして若い女と話合つてる時だけでも年齢も妻子も忘れて、若い人達と同じい氣持ち同じい心になつてゐたいのに、あはよくば戀までも仕兼まじき意氣込でゐるのに、あゝ駄目だ駄目だ、妻子を引合に出されちや頭から水浴せられたも同然だ。

己れは一寸悲觀して、火箸で火をいぢくり出してる所へ、又お母アさんが上がつて來た。

「あの私し大變濟みませんが、一寸用事が出來ましたので、今から出かけて來ますから、どうぞ御緩つくりお遊びなすつて」と、娘一人を置い

て行つても何等の不安を思はない所、流石に矢つ張り東京の家庭だ。

「ぢや私し斯うしてゐても好いでせうか」

「えゝ御暇でしたら何卒居て下さい、妙子は淋しがり屋ですから」

と云ひながら「ぢや大變失禮ですけど」と叮嚀な挨拶して、下りて行つた。何んとも思ふてやしない、捌けたものだ。

二階には妙子さんと二人限りになつた。

雑談の後

「庭は？」と、訊くと、

「此方が」と云ひつゝ立上がつて、障子を開いて見せたかと思ふと、突然、

「まアいゝお月！」と、驚歎する。己れも立つた、そして見た、白金の

様な半月形の月が輝いてゐる。

「成程いゝ」と、眸を上げて見詰めてゐると、「まアいゝ、まアいゝ」と云ひ續けてゐた彼女は、フッと振り返つて、

「銀座お嫌ひ？」と問ひかける。

「銀座を嫌ひな者てありやしないでせう、私は毎晩の様に行きます」

「左様を私も！　今から散歩に參りませうか」

「でも家は？」

「兄もゐます、女中もゐます、それに弟もゐますから」

「兄さんがゐるんですか」

「えゝ」

「少つとも知らなかつた、左様ですか」

「あの一寸お待ち下さいな、羽織丈け着代へて來ますから」
「着代へなくてもいゝぢやないか」
「左様々々」と、チラリと自分の着物に眼を落しながら、
「ぢや此の儘でもいゝわ、出ませうか」
「出てもいゝけど、若し留守中にお母アさんがお歸りになつたら、叱られない？」
「いゝえ其麼事」と、笑ひ退けて、
「いつも母に連れられて出かけるんですけど、母の忙しい時には誰方にか連れて出て下さる様に願つてる程なんですもの」
「それなら」と、己れは安心して、
「ぢや、さア出掛けませう」と、帽子とオーバを手にした、美しき君と

銀座散歩とは願つたり協つたり、それも此方から云ひ出したのでなく、先方からの勸誘だから尙更以つて詩韻漂渺だ。
下へおりて行くと、兄らしいのが火鉢の前に座つてゐたのが廊下から眼についた、突然だつたので吃驚したらしい表情をした、そしてニコリとして見せた、己れもニコニコしながら通つて了つた、どつちも挨拶する丈けの餘裕が無かつた。
靴を履いて玄關へ出ると、妙子さんは草履ばきで直ぐ出て來た。
「さア行きませう」
斯う聲をかけながら二人は並んで歩いた。
「貴嬢も矢つ張り銀座をお好きと見えますね」
「大好きなの、暇さへあれば出かけるんですよ、一廻りグルッとして來

ると、頭腦がカラリとするんですもの！」と、己れと同じい事を思ふてゐる。

「夏は毎年どこへ行くんです？」

「去年は鎌倉へ參りました」

「永くですか」

「えゝ可成」

「それぢや斯うした人を知りませんか、年齢は二十頃で、素敵なチャーミングな、髪を眞中からサッと別けた、素敵なチャーミングな樣子をする人」

「女の方ですか」

「無論女です」

コクリと考へて、「どなたでせう？」と云ひながら、

「お名前は？」

「藤山高子と云ふんだつたと思ひます」

「まア藤山さん？　まア！」と、ひどく仰山相な聲を出して、

「何うして御存じなんです？」

「何うしてつて知つてます」と、己れは云つていゝか惡いか突嗟に尋ねられたので、兎も角も斯う云つた、それは一面妙子さんが彼女に對する印象の善惡に依つて變はるからであつた、この所非常な懇意とも、一寸の知合とも、どつちも口に出し得なかつた一應偵察戰として單に何氣なく「何うしてつて知つてます」

「貴嬢知つてますか」と答ふるより差當り方法が無かつた。

「知つてる所の騒ぎぢやありません、一緒に永くゐたんですもの！」

「へー一緒に？」

今度は己れの方が驚いて了つた。

「そんなに懇意な仲なんですか、あの方と？」

「初めから懇意ぢやなかつたんですけれど、それが斯うなんです」と、彼女は詳しく物語つた。

去年の夏妙子さんが母と共に鎌倉の海水浴へ行つた、突然出かけて行つたので宿屋は滿員、途方に暮れて何うしようかと思うて立ち案じてゐた。すると宿屋でも大變氣の毒がつて、それぢや物置同然の所が空いてますから若し其處で好かつたら、そこに辛抱して下さるならばと云ふことであつた、折角來たんだからと、それぢやと其の部屋へ案内された、

成程云はれた通り薄暗い陰氣な部室であつた、一二日我慢してゐたらその裡いゝ部屋が空くだらうと思ひ慰めて辛抱してゐたが、流石に夏の海水浴場、而かも名だゝる鎌倉とて生憎そこに泊つてゐた人々は滯在を定め込む連中ばかりだつたので、何んとも部屋の都合が附かなかつた。それぢや仕方がないから何處か善良な家庭の空き間でもあつたらと宿屋の主人に相談した、宿屋でも大變氣の毒がつて何うにか御心配して上げませうと云つてる所へ、おかみさんが出て來て、それなら親戚の娘が家一軒借りましたが、非常に淋しがつて先日から誰方かいゝ方をお入れしたいゝと申してましたから、若し貴嬢様の方で其れで宜しければ其の方へ一つ聽き合はせて見ませうと云ひ出した、此方は願つてもなき事と思ひ、それぢや萬事宜しくと頼むだ。すると其の日の夕方一人の二十ばか

りの女性が遣つて來た、それが高子さんであつた、高子さんは一目妙子さんを見るなり、貴嬢なら申分がない、實は外に色々と申込者がありますけど、私は貴嬢を選びます、どうぞ直ぐ來て下さいと其の儘引き取つて了つた。母は斯うして娘さへ落着く所が出來れば之で安心だと、其の日の夜行で歸京して了つた。

高子さんの家は海水浴場に近かつた、のみならず見晴らしのいゝ二階家であつた。妙子さんは階下に置いて貰ふ樣になつた。それからの二人は互に誘ひ合つては海水浴へと仲よく出掛けた。

日が經つに從ひ、高子さんのお友達と云ふお友達は男ばかりであると云ふことに妙子さんは氣が附いた、而かも若い青年や紳士のみであつた、オヤ〳〵こりや大變なお嬢さんもあるものだと妙子さんは少からず驚か

されて了つた。然しよく見てゐると仲々確かりした所があつた、そんな家一軒に一人だけ何等の監督者がゐないのだから、自由が出來る筈だのに、男は決して泊めなかつた、のみならず夜九時の鐘を打つと、もうお歸りなさいと男と云ふ男を片ッ端から追ひ返して了つた。

妙子さんは斯うした中にゐたものだから、自然樣々の男に紹介された、高子さんの從兄だと云ふ人にも逢はされた。高子さんはよく其の從兄と散歩する樣に妙子さんに薦めた、二人はよく散歩した、けれども何んとも無かつた。

斯うして妙子さんは華かな一夏を鎌倉で送つた、彼女は高子さんが「誰方よりも貴嬢が一番いゝ、是非私の家へゐらつしやい」と薦めて呉れた好意を何日迄も忘れることが出來なかつた。

「そんな譯であの方とよく戀意なんです」と妙子さんは最後を結んだ。
「左様ですか、ホウ」と、己れは成程と頷いた。
「他見男さんは又何うして御存じなんですか」
「どうしてつて」と、一寸シドロモドロした。
「矢っ張り鎌倉にゐらしたんですか」
「あすこには居なかつたですけど、然しよく行きました」
「その時御懇意になつたんぢや無いんですか」
「いゝや」と、唯笑つた、彼女は其の笑みを見て不可思議らしく笑つた、私は到頭云つた。
去年の秋であつた、金春館で活動を見てゐると、突然後から物優しい聲で、私の肩を叩くものがある、オヤと振りかへると見知らぬ令嬢だ。何

んだらうと不審相にして見詰めると同時に、その令嬢が小さい聲で「洋服の襟が折れてゐますから」と云ひながら自ら直して呉れた「どうも有難う」と少し赤らみながらお辭儀すると「どう致しまして」と彼女も懇ろに挨拶した。
軈て活動が終つて、外へ出て、今日は市内線は屹度込み合ふだらうと思はれたし、それに銀座をブラ〳〵散歩しながら、新橋から山の手に乗つた方がと、別に急ぎもせずブラッと歩きながら、やがて何の氣もなくフイと後を見ると、先刻の令嬢がッイ近くまで接近してゐる、先方は己れの顔を其の時見てニコッとした。それを見た己れは何うしても「やア先刻も」と言葉をかけない譯には行かなかつた「いゝえ」と女は謹ましく答へた、二人は自然並んで歩いた、私は今から銀座を散歩して歸る所だ

と云ふと私も左様しようと思ふてゐたと彼女は答へた、それから二人は可成りの時間を物語つた、その女が高子さんです。高子さんを一番最初に知つた動機です、漸次懇意になつて、近頃はよく逢ふことがあります。そんな事で彼女が昨年の一夏鎌倉にゐたと云ふことも聽いたんです。そんな譯で動機が何人の紹介でも何んでも無いものでしたから一寸話し難くかつたです」

「オヤ左様ですか」と、彼女は別に驚きもせず、

「あの方は其麼方です、そりや何でもによくお氣が附くんですよ、そして誰方にだつて、男の方にだつて平氣で注意なさることがあるんですよ、開化けてゐらつしやるんですもの！」

「一體貴嬢はあの方を何麼人だと思ひますか」

「それでね、母がその後その鎌倉の家へ私を訪ねて來た時、高子さんの所へ男の方が三人も四人も來てゐるのに、吃驚して、オヤ〳〵之は飛んでもない所へ私をと思ふたらしいんですよ、そして二三日ゐて樣子を見てゐて、成程あの方は何んだか自墮落相に見えるけど、いざと云ふ所が確つかりしてゐると感心して安心して歸りましたよ。全くあの方は確つかりしてゐる方ですよ。でも其麼譯ですから非常に最初は誤解を受け易いんです、私も隨分最初は他人から忠告されました、でも忠告した人達は表面ばかり見てゐるんですもの」

「全く最初は誰れだつて誤解して了ふでせう、然し何うして〳〵頭腦が素敵に明晰よ」

「えゝ、そりや頭腦がいゝんですよ、トランプを或る人から教はつた時

に難かしいのを一遍で覺えて了つたんですもの」

「兎に角い、頭腦を持つてゐる」と、己れも或時感心したことがあつたから、極力それを力説した。

「それに何んでも涙手なんですよ、鎌倉にゐた時も、あの人の風たら知らぬ方がありませんでした、パッと人目を惹く姿で評判でしたよ、それにあの美しいんでせう、あのスタイルでせう、大抵の方は參つて了ひますよ。

夜なんか散歩に出る時の浴衣の模様つたらありませんでした、振り向かない人て無いんですもの。私の母も私の着物の柄は地味なもの許り作つてゐましたけど、あの方の風を見てからガラリと代へて了つて、此の頃は隨分氣に入るものを買つて呉れる樣になりました、だから近頃は少つ

とも母と喧嘩はしません」と、美しい笑みが白い顔に此の時浮び出た。

「貴嬢の樣な優しい顔して喧嘩なんかしますか」と、にこ〳〵しながら訊いた。

「えゝ、だつて」と、白い齒がニッと覗いた。

いつの間にか銀座へ來た。人の往來流石に烈しい。露店の前には所々人が黒集りになつてゐた。

妙子さんと己れとは時々目立つた飾窓の前に立つては「いゝなア」『素敵だわ』と交換しながら歩いた、兎も角も妙子さんは際立つた縹緻とて正面から來る男も來る男も眼を皿の樣にして見て過ぎた、屹度兄弟が散歩に出てゐると思ふたであらう、何故なら妙子さんは少つとも肉感的な型でなく、それに小柄な方だつたので、何うしても戀人らしくは見えな

かつた、又新婚の夫婦とも附かなかつた、何うしても矢つ張り兄弟であつた。

資生堂の前へ來て突然、

「入りませうか」と、己れは立止つた。

「えゝ」と、氣の毒相にしながらも彼女は頷いた。

飾窓に面した方の席が空いてゐたので、二人は其處へ向ひ合せて座つた。

「何を飲みませう、何がいゝですか？」と、己れは白い顏に訊いた。

「何んでもいゝわ」と、妙子さんは答へた。

それならと今まで飲んだ事のないものを註文した、ボーイは直ぐ持つて來た。

唇に當てゝスウと吸ふ。

「妙な味ですね」と、己れは云つた。

「始めてよ」と、妙子さんが云つた。

「戀の味みたいな」と、己れは笑つた。

「戀の味て此麼ものでせうか」と、眼元に笑みを含めて彼女は訊いた。

「なんだか甘い樣な酢ぱい樣だから」

「此麼ものでせうか戀と云ふものは？」

「知らないんですか、まだ？」

「えゝ」

「なアに知らないことはあるもンですか、屹度知つてるに違ひない、何うです？　よく似てませう此の味が」

すると彼女はオホッとした。

「私はまだ酢ぱい所は知らないわ」

「ぢや甘い所丈けですね？」

「オホッ」

「ウワハ、素敵だナ、あゝ己れもモ一遍若返へりたいものだ、そしたら思ひ切つた戀が出來たかも知れないけど、駄目だ此の年齢になつちや」

と、呟やいて見せた。そして己れは彼女の口から「まだお若いぢやありませんか、今が花ですよ、人生ですよ」と云ふ言葉が欲しかつたが、彼女はウンともスウとも云はなかつたので大分拍子抜けして了つた。彼女は單ににこやかな笑みより外何等の物を與へなかつた。

「あッ、さう〳〵、すつかり忘れちやつてた」と、彼女は急に何か思ひ

出した樣に獨言を云つた。

「何です、急に？」

「いゝえね、明日シコラのセロが慶應であるんです、私しお友達に誘はれてゐたんです、それを今」

「シコラが慶應で明日？　祭日ですね」

「えゝ、ゐらつしやいませんか」

「エーと明日と、まてよ」と、己れは考へて、

「明日は駄目、野球の試合を見に行くから、ベースボール氣狂ですから」とは云つたものゝ、シコラのセロは幾遍も聽いてゐたので別に大した興味も起らなかつたが、たゞ妙子さんと一緒だと云ふことが何んとなしに其方へ私の氣を引いた、己れは何か妙案もがなと考へ直した。

「あッ左様しよう」と、獨言しながら、

「ぢや若し明日雨だつたら、シコラへ行きます、天氣だつたらベースボールの方にします。ぢや斯うしませう、若し雨の時には一應朝の裡に電話をかけますから、そして何處かで待ち合せた上一緒に參りませう」

「えゝ是非、雨ならいゝわ」

この答へは少くも己れに對して夥だしい好感を有してゐると云ふ一種の暗示の樣に思はれた。私は何んとなく嬉しかつた。

資生堂を出て、新橋堂の書店を覗いた。彼女も入つた。と、突如に己れの腕を引張つた、何んだらうと振向くと、下を指さして見せた、眼を落すと、其處には己れの著書ばかりがヅラリと並んでゐた。己れは默つて頷いた、店員は妙な顏した。

そこを出ると、

「隨分澤山並べてありましたわねえ」と、驚いた口調で云つた。

新橋を渡つて、直ぐ川に沿うて左に折れた。人通りが急に絶えた。二人の肩と肩は擦れては放れ、放れては擦つた。

「私の腕を組むで歩きませんか、西洋人の樣に」

彼女は一寸モジ〳〵した。

「平氣ぢやないですか、そんな事、如何にも親し相に見えるものですよ」

斯う云ふと、妙子さんは恥かし相にして私の腕に其の細い白い腕を挾んだ。

「いゝものでせう？」

「えゝ」

その聲は小さかつた。

橋の上で欄干にピタリと添ひながら倚りかゝつてゐると、下を通る船から冷やかし半分の笑聲が聽えて來た、それは何んと云つたか充分に解らなかつた、私共は強ひて聽かぬ振してゐた。

「私は貴娘に何麼感じを持つてるか解りますか」

私は彼女の頰近くで囁く樣に云つた。

「解ります」

「私の氣持ち解りますか」

「えゝ」

「貴娘は私に何う感じますか」

「だん〳〵親しみが強くなつて來る樣に思はれて來ました」

手が手を求めた。指が指を求めた。見よ二人は握手した。然しこの握手は、決して戀人より得くる樣な强い何物をも齎らさなかつた、飽く迄も友達としての情趣の場面に過ぎなかつた。

再び銀座へ出た。

博品館の隣りの陶器店まで足が來ると、彼女は思はずピタリと立止まつて、ヂッと何物かに眼を凝らした。

「何を見てゐるんです？」

「あ　茶瓶、あの眞赤な、そして可愛らしい、なんて素敵なんでせう？」

「氣に入りましたか」

「えゝ、あれにばらの花を活けて書齋に飾つて置いたら、あゝ堪らないでせうね」と云ひながら硝子越しに抱きたい許りの素振りを見せる。

「そんなに欲しいと思ひますか」

「えゝ」

「左樣ですか」と、云ひながら知らぬ顏してツカ〳〵と店の中へ入つた、そして其の茶瓶をと所望した、店員は「外に色々ありますから」と改めて陳列棚へ案内した、そこには前で眼に附いたのと同じのがあつたので、之をと云つた、ハッと云ひながら店員が其れを紙に包まうとする時、妙子さんが入つて來て、チラと之を見て、

「アラ、前にあるのと色が違うぢやないの？」と、店員にたゞした。

「いゝえ同じです」

「でも違つてゝよ」と、妙子さんは我を張つた。

「左樣ですか、それぢや前のを差上げませう」と、何事も客の意に逆ら

はぬ様にと、それを持つて來た。二つを並べて見較べて見ると、微かに前にあつた方のが色が濃かつた。

「孰方がいゝでせう」

「矢つ張り此方がいゝわ」と、濃い方を妙子さんは云つた、そして店員に「それ御覽なさい、少し違ふでせう」と翳して見せた。「私共には同じい様に見えますけど」と飽く迄も店員は逆らはなかつた。そして希望の物の方を包んで呉れた。

外へ出て、

「妙子さん、之を貴娘に」と、差出した。

「あら私に？　下さるの？」

「えゝ、お持ち下さい」

「まア――」と、美しい笑みを見せて、

「まア――嬉しい！」と、カナリヤでも抱く様にして受取つた。

「あゝ、まアー、どうして、あゝ嬉しい」と、感嘆詞を幾つも發して悅に入つた、本當に心から歡喜したらしい。

ブラリ〳〵と伊東文房具店まで來た、そこの飾窓には色樣々な狀袋が並べ立てられてあつた。

「ちよつと妙子さん」

「え？」

「いゝ狀袋がありますね」

「オヤまア」と、彼女もよたれかゝりながら見入つた。

「どれが好いでせう？」

「さア、どれも之も」と云ふて美しい眸を彼方此方した。
「あのクリーム色は？」
「あれ？　あれよりか此方の紫がゝつた淡紅色の方がいゝわ」
「どれ？」
「あれ」と、白い手が動いた。
「成程あれもいゝね、君が買ふとすれば此の中で何れを買ふ？」
「さアね、矢つ張り今のよ」
「あれだね」
「えゝ」
「左様？」と云ひながら、ッカ〳〵と中へ入つた、そして店員の一人を引張り出しながら今の狀袋を指さして、「あれと同じいのを」と云つた。

店員はズッと奥へと案内した。そこには前に並べてある種類通りのものがあつた。紫がゝつた淡紅色の狀袋は直ぐ見付かつた。箱入りの其の中には書簡紙も下の方にあつた。それを買つて出た、妙子さんは店の前にゐてノートをいぢつてゐた。己れの姿を見て、
「もうお濟みになつたの？」と訊いた、己れは唯頷いた。二人は出た。
「ねえ妙子さん」
「え？」
「今の狀袋を買つたんですが、誰に遣るのか知つてゐる？」
「奥様？」
「いゝや」
「ぢや誰れでせう、さうだ高子さん？」

「いゝや」
「ぢや誰れでせう、私の知らない方？」
「いゝえ、よーく知つてる方」
「誰れでせう？」と、暫らく考へ込んでゐたが、
「解らないわ」と、投げ出して了つた。
「之はね」
「えゝ」
「貴娘に」
「私に？」
「左様です」
「でも私は僅つた今之れを買つて頂いた許しだに」と、茶瓶の包みを翳

しながら、流石に深い遠慮を見せる。
「でも貴娘の爲めに買つたんだから、持つてお歸りなさい」
「まア何うしたらいゝでせう」と、手を出さない。
「何うしたらいゝでせうって、受取つたらいゝでせう」と、差出した。
「本當に色んな物頂いて」と、羞恥かみの裡に包み切れぬ喜ばしさを見せて、「どうも有難う御座います」と流石に何日迄も愚圖々々しない所矢つ張り江戸ッ子だ。
「あゝ嬉しい、こんな嬉しい日はない、私が今日欲しいと思ふたものが皆手に入つたんですもの」と、晴れ〴〵しく喜びの高鳴りを禁じなかつた。
それから京橋を渡らずに淋しい所を先刻の様に腕組み合せながら、彼女

の宅まで見送つた。母親はまだ歸つてゐなかつた。

その日は斯うして別れた。

○

目醒めて見ると、雨だ、而かも烈しい雨だ。折角の野球が總かりオジャンになつたのでガッカリする。斯うなりや仕方がないと、妙子さんの所へ電話をかけ、昨日お約束した通り今日は雨だから慶應へ行きます、就いては何處かで待ち合はさうぢやありませんかと云ふと、實は今朝程からお友達がお遊び旁々誘ひに來てゐらつしやるんです、私だけなら何處でも指定の場所へ行きますがと云ふ返事だ、それでは二時までに屹度向ふへ行つてゐて呉れたまへ、己れが早いか君が早いか知らぬけど、早い方が待ち合はさうぢやないか。ハイ解りましたと電話を切つた。

一時頃、雨を突いて慶應へと出掛ける、慶應の中はベースボールの時、運動場へと素通りする時より外に行つたことが無い、どこに講堂があるのかサッパリ知らなかつたけど、人の後から隨いて行けば解ると、前に進む人を標準にして進んで行つたところ、軈て其の影は兎ある小舍に隱れた、オヤと思ひながらも隨いて行つたら便所だ、人を馬鹿にしやがる。到頭訊いた、敎へて呉れた、敎へられた通りを行く。すると遙か向ふの方に多くの學生がガヤ〳〵してゐるのが眼についた、ハヽアン彼處だナと眼を放つとその黑い人達の中に唯一點燃ゆる樣な裝ひを凝らした美人が交つてゐる、あッ妙子さんだと直ぐ氣が附いた。向ふでは然し解らなかつたらしい、己は其の解らぬを幸ひお互が遠くから眼と眼で物を云ふ一種の極り惡さから遁れようと態と蝙蝠傘を前へ傾げて視線を避けなが

ら近いて行つた。階段の所で始めて傘を眞直にした。

「オヤ！」

氣が附いたと見えて、彼女はニッコリ進み寄つた。

「ヤア」と、己れも始めて氣附いた樣な風をした。

「切符の賣場は？」

「いゝえ、私し買つて置きましたから」

「そりや不可ない、そんな事しちや」

「でも買つて了つたんですもの！」

「そりや濟まなかつた」と、一寸濟まぬ顏して、白い細い手から靑の切符を受取つた、そして受付を過ぎた。

何よりも目に附いたのは講堂の正面に懸つてゐる故福澤諭吉先生の全身

姿であつた、袴も履かず着物の着流しであつた、直感的にオヤだらしの無いと思ふたが、よく考へて見ると、先生の面目が却つて躍如としてゐる樣な氣がした、これ慶應の代表的型である。

「君のお友達は？」と、妙子さんを振り返へると、

「此方」と云ひながら、妙子さんは場の中央へ案内した、そこには四五人の男がゐたオヤ男と來たのかと思ふて、小さい聲で「女の方は？」と訊くと、「あすこに？」と横を振返つて指をさす、見ると美しい令嬢達が四五人並んでゐた。二人が其方を見た時先方でも一心に此方を見詰めた。みんなの顏には微笑が浮んでゐた。

「何故一緒にならないんです？」と、訊いた。

「あの友達は又別にあの方達のお友達を待つてゐらつしやるんですよ、

それにそらあの側の年老つた御夫婦の方がゐらつしやるでせう。偶然こゝでお逢になつたんです、お知合の方ですつて。だから男の方の中へ交り過ぎてゐるのも好くないと、態とあゝしてゐらつしやるんですよ」

「ホウ」

之で男女別居の體たらくも讀めた解つた。

大雨の故か何時まで經つても講堂内は寂寥々たる有樣であつた、司會者は時間勵行を延ばして迄も客を待つたが遂に其の效がなかつた、仕方なしに開會が宣せられた。司會者は云ふたシコラ氏は感激の強い人だから、出來る丈け拍手を大きくして呉れ、そして以つて彼をして少數の前であると云ふ意氣の頓挫から免がらしめて呉れと云ふ註文であつた。

シコラが出て來た時、人々は出來得る限り拍手と歡呼の唸りを續けた。

彼は嬉し相に笑むだ、斯くして獨特のセロの妙音は萬場を魅し始め出した。

己れはシコラ氏は之で幾度も識つてゐたから敢て深い興味を唆る譯には行かなかつたが、シコラ氏の伴奏者が思ひも掛けぬ絶世の美人だつたのに、唯々あれよ〳〵と驚いて了つた。

「まア素敵な方！」と、女の妙子さんまでが恍惚した樣に見詰めた、みんなの眼は悉く伴奏者の其のレデーに集まつた。まことに其の口元は恰も春の囁きの如く、其の眸は恰も鳩の如き穩かさと朝の光を浴びた露の樣であつた。背の高さ、スタイルのよさ表情の上品にして美しく而かも愛嬌に富める、たゞ〳〵感嘆の外何物も齎らさなかつた。その纖手が籠めたる力の前にピアノの床しき許りの音は或は豪壯肉を躍らしめ、

或は纖細溪間のせゝらぎの如く訪づれた。

「あんなに巧みに彈ける人は日本に一人もゐません、あの有名な小倉末子でも久野ひさ子でも、この人に比べたら足元へも寄れません」と妙子さんを距てた巨大なる體軀の持主は妙子さんの脊中から小さく私に囁いた、この方面に無識な私は猶更驚きを重ぬる許りであつた。名は？

と見ればヒルベルク夫人と書いてある、ヒルベルク夫人！　恐らく私にピアノの最上の音を耳に聽かせた人であらう。終つてから、私は何んとなく此の儘妙子さんと別れて了ふのが惜しい氣がしたので、

「妙子さん、銀座の金春館の活動を見に行かない？　若し側にゐる人達も行く樣だつたら一緒に誘うて見たら何う？」

妙子さんは直ぐ小聲で其のことを隣へ傳へた。隣の男は妙子さんに囁い

た、妙子さんは其の返事を齎らした。

「あのね、隣の方達も左様しようと思ふてゐたんですつて！」

「ホウ左様か、そりや好かつた」と、己れは雙頰を崩した。

「それ己ね隣の人達は今から皆麼で夕飯を他所へお喰がりにゐらつしやるんですつて！　それから金春館へ行くんですつて！」

夕飯!?　左様だ、己れは腹が少つとも空りやしないが、成程活動へ出かけるには其の心配から先きに片附けなくちやならぬ。

「ぢや妙子さん、私と貴娘と何處かで食事を濟ませて行きませう」

「でも其麼……」

又遠慮する。

「左様しよう、え？」と、オツかぶせる様に云つた。妙子さんは勿論そ

れを好ましいことであつたから二度目には「えゝ」と肯定を與へて了つた。

「どこがいゝ？」

「どこでも！」

「村井の地下室は？」

「あすこは好い所だと好く誘はれますけど、何んだか氣極りが惡い樣で、恥かしい樣で」

「ぢや行つたことが無いんだね」

「えゝ噂ばかり、母なんか始終行きますけど」

「ぢや彼處へ行きませう、少しでも見聞を廣めて置くと云ふことは若い人だちに必要なことだから、なアに恥かしいものか、左樣しよう」と云

ひながら立上がつた。

外には雨は矢つ張り降つてゐた。己れは面倒臭いので、自分の蝙蝠傘をすぼげて妙子さんの傘の中へ一緒に入つて行かうかと思ふたけど、若し左樣したら假令コートを著てゐても女は着物の濡れることが心配だらうと、今度は此方が遠慮して敢て此の行爲をしなかつた。

正門を出る時、妙子さんの女の友達と並行した。

「綾子さん」と、聲かけて、

「今から好い所へ行くのよ」

「あら何處？」

「金春館へ」

「まアいゝわねえ、お供さして頂戴な」

「えゝ、どうぞ」

「でも今日は駄目ね、もう暗くなつたんですもの、明日ゆつくり話して下さいね」

「えゝ面白いことよ、屹度。ぢやお先き、左樣なら」

「左樣なら」

妙子さんは別れてズン〳〵己れを追ふて來た。

「どこのお嬢さん？」

「山村て醫學博士の方御存じ？その方のお嬢さん、私の大の仲善しよ」

「ホウ二人ぬたね」

「えゝ御姉妹よ」

「美しい人だね、殊に眼が素敵だ」

「左様ですか、明日學校へ行つたら早速云つて上げませう、屹度喜ぶでせう？」

「何うして？」

「他見男さんが賞めてゐらしてよと云つたら！」

坂を下りて直ぐ電車に乗らうとしたが、人込みの爲め果せなかつた、仕方なしに方向を代へて電車道を選ぶ、始めて通る道とて勝手が解らない、幾度か立止まつては他人に訊いた、皆深切に教へて呉れた。

漸つと乗る、直ぐ又乗換へた、あとは日本橋まで一直線。

村井銀行の地下室へと下りて行く、妙子さんの羽織が又なき派手だつた故か衆目は一時に襲ふた。先づ休憩室で一休みしようと思ふと、直ぐ宜しう御座いますと女ボーイが云ふので其れではと其の儘食堂へ行かうと

した、擦違ひにピタリと今洋行してゐる友人の其の家に寄食してゐた二學生に出合つた。オヤと孰方も思ふた、然しお互に喋べつた事のない仲とて物も云はなかつた、唯先方がお辭儀したから此方も其れに返した外何等の仕業が無かつた、然し再び振返つて見た時、二人はヒソ〳〵と互に語合つてゐた、屹度己れが得ならぬ美人と相伴なのに呆氣に取られて羨しさを喞つてゐたのであらう。

食堂でも總ては注目した、全くあまりに妙子さんの着てゐる羽織が華かさ過ぎてゐた。

二人は向ひ合つて座つた。

「何うです此處は？」

妙子さんはぐる〳〵見廻はして、

「いゝ所ですね」

「いゝ所でせう、先刻貴娘が道々話してゐた樣にボーイが傍に立つてヂッと見てゐないから大丈夫安心ですよ」

「全くあれ丈けは閉口してよ、精養軒へ行つても中央亭へ行つてもボーイが少しも傍から放れないんですもの」

「此處は斷じて其麼ことはありません」

斯くて食事が始まつた。妙子さんも己れも滿足の裡に終ることが出來た。

外へ出てから、私は云つた、

「ねえ妙子さん、今から金春館へ行くと歸りがどうせ遲くなるから一應家へ立寄つて左樣云つて置いたら何うです？　どうせ此處からお宅は近

いんですから」

「えゝ、さうしますわ、そしたら母も安心しますから」

そして二人は彼女の家へ來た。己れは入ると永くなる憂があるので門の前に待つてゐた。程もなく「まア、まア」と云ひながら母人が出て來た

「まア本當に色々御心配をかけまして、只今も聽きますれば大變御馳…」

「いゝえ」と、手早く遮ぎつて、

「今から金春館へ妙子さんをお借りしようと、一應お知らせに」

「いろ〳〵御深切に。彼娘がもう喜んで〳〵、いづれ其の裡ゆつくりお禮を」と、云つてる所へ妙子さんが「お待ち遠さま」と姿を現はして來た、見れば羽織はチャンと着代へて、サッパリした裝ひだ、これなら彼麼に目立つこともあるまい、さア出掛けませう。家から金春館まで歩い

ても短かい距離だつたけど、何となく氣が急いてゐたので電車の便を藉つた、雨に濡れた銀座の町も又一しほの眺めであつた。

館内には既に先刻の人達が二階の特等席に扣へてゐた、聽けば皆公達の若殿原と云ふことであつた。

「遲くなりましたね」と、薄闇の中から聲がした。

「一寸妙さんの家へ寄つて云つて來たものですから」

「あッ左様ですか、それなら妙子さんも悠つくり出來て」と云ひつゝ大きな男の手は妙子さんの脊中をポンと叩いて、

「嬉しいでせう、嬉しいでせう」

妙子さんはニンガリ微笑した。活動は頻りに廻はつてゐる。辯士は喋べつてゐる。

一同は暫らく沈默する。

いつの間にやら妙子さんは密つと懷から紙片れを出して、前にゐた仲間の洋服の襟からこつそりブラ下げる、その手際が拙かつたので、早くも振向かれた。

「惡戯しましたね」と、小さく口利いた。

「いゝえ」

「いゝや、確かに」と、襟へ素早く手を廻はして紙片を摑み、

「そら何うだッ？」

「ホッ、ホッ、ホッ」と、他愛もない。

再び沈默、そろ〳〵と又妙子さんが始め出す、その時妙子さんの側に座つてゐた見知らぬ外人が笑ひを含みながら、斯うした方がと云つた具合

に巧妙な方法を教へた。妙子さんは其の通りして挾むだ。それは幸ひ解らなかつた、然し妙子さんが思はずクスリと洩らしたので、其の笑ひ聲の爲め氣附かれて了つた。

「不可ないよ、靜かになさいお轉婆さん」

「ハイ、ハイ、行儀のいゝ子になりますよ、氣を附けッ」と、態とらしくブンとそりかへつて見せる。斯うなると活動を見に來たのか、惡戲をしに來たのか解らない。

帝劇の女優が二人も來てゐた。某文人の妹も來てゐた。然し二階の大半は外人で占められてゐた、金春館ほど外人の來る活動館て無い。

出たのは十時だつた、雨はまだ止まない、何んと云ふ今日の雨はしつこいんだらう。一同は有樂橋まで歩いた、恰度そこへ私の乘る可き新宿行

の電車が遣つて來た、之を遁したら少くも十分間待たされると思ふたので、私は慌てゝ、

「ねえ君、濟まないが妙子さんを家まで見送つて呉れたまへ」と、願つた。

「今更妙子さんを押し付けられちや」と、歸りが遲くなるものだから、人々は尻込みした、然し内心は何うだか解らない。

「頼む、あの電車で私は……で無いと……兎ても」と、氣が急いたので碌にハッキリ云へなかつた。

「さうですか、それなら」

「ぢや宜しゆ御座いますか」

「仕方がありません」

「見送つて頂かなくても好う御座います、明るいんですもの」と、妙子さんは其の時皆が餘り自分のことに就いて心配してゐるので、斯う云つた。

「だつて女だから、そりや不可ない」と、己れは確かに送りかへしますと母親と別れる時云つた責任上、何うしても結着は結ばねばならなかつた。

「大丈夫、見送ります」と、人々は答へた。

「それでは」と、云ひながら動き出した電車を追ッ駈ける樣にして私は走つた、走りながらも折目正しいヅボンに泥の刎ね上がるのが氣が氣でなかつた、到頭乘つた。

あの人達は美しい妙さんを挾むで今頃は銀座の光りを溶かした雨の中を

面白氣にさゞめきながら歩いてることだらう――電車に搖れながら私は其麼事を思ふた。

○

次の次の日、

明治座の活動が非常にいゝと云ふ評判を知つたので、フイと暇がてら一寸行つて見たくなり、妙子さんに君も行かないかと電話で訊いた、すると「えゝ活動なら」と大喜びだ。夕食を丸花で濟ませて誘ひに行くと、又妙子さんが出ないで母が出た。

「妙子さんは？」と、訊くと、

「兎に角まア一寸入つて下さい」と云ふ。

「それぢや遲くなりますから」と、玄關に蹲まうとすると、

「一寸お話申上げなくちやならぬ事が出來たんですから、ま一寸丈はでも」

お話とは一體何んだらう？　己れはそれではと上がつた。

部室に座るや否や、

「何んです？」と、改まつた樣に訊つた。

「實はね妙子と私が今夜急に小田原へ行かなくちやならぬことになつたんです」

「どうして？」

「あれの兄が病後の保養をしたいと云ふんです、そこで實は昨夜家を見に參つたんですが、良さ相な家だが、定めていゝか惡いか判斷に苦しむから、一應大急ぎ來てくれと云ふ先刻電報があつたんです。それで其れ

ぢや今夜々行で行くと返事を出したんですが、私し一人で行くのも淋しいし、それに妙子も學校が休みになると先方へ行つて遊びたいと云つてますので、妙子の氣に入らん家でも困りますし、旁々一緒に連れて行きたいと思ふのです、それで今夜の明治座行はどうか一つ、そんな譯ですから」

己れは折角今夜は明治座へと定め込むだ手前、どうしても思ひ爛へすのが、大きな苦痛であつた、然し妙子さんが明治座行を進まぬと云ふなら、そりや仕方もないと思ふたので、

「妙子さんは孰方が希望なんです？」と、訊いた。

「妙子は明治座の方へ向いてるんですけど」

「それなら明治座へ行つたらいゝぢやありませんか」

「所が妙子がゐないと少々困るんです」

「何うして？」

「その家の關係で、それに私も道中淋しいんですから」と、根據が何んとなく薄弱だ。

「なアに明日にしたらいゝのに」

「所がもう電報で今夜と知らせたものですから、兄は宿屋の交渉も済ませてあるでせう」

「ぢや今夜なら何時でもいゝんですか」

「えゝ」

「ぢや斯うしたら何うです、最終の汽車に乗ることにして、それまで明治座にゐたら」

「それも左様ですが……」と、詰められて後の文句がにぶつた。

「折角妙子さんが明治座の方へ氣が進んでゐるのなら、さうした方がいいでせう、若い者の氣持ちを餘り邪魔しない方が現代の母ですよ」と、己れは笑つた。

「それに今夜行くと云つて時間を云はなかつたんでせう、最終のに乘つて行つても敢て差支へが無いでせう」

「そ、そうです」と、理屈詰めにあつて母は一言もない。

「私も先刻お斷わりを喰つてゐたんだつたら、斯うして出ても來ませんでしたが、行くと仰しやつたので、實は切符も電話で頼んで了つてあるです、もう駄目ですと云はれたのを無理にと願つたんです、その手前今更取消なんて兎ても云へないんですから。

いゝでせう、今云つた具合なら。兎に角一寸妙子さんに逢つて見ませう、妙子さーん」と、己れは大きな聲を出して呼んだ「ハアイ」と、隣の部室にゐたらしい、返事が明白きこえた。

彼女は襖を明けて入るが早いか「今晩は」

「妙子さん」と、己れは見上げて、

「貴娘は明治座へ行きたいんでせう？」

「えゝ」

「それなら明治座へ行つてから、汽車に間に合ふ樣に乘つたら何うです？　今お母あさんに話しましたら」

「妙子お前それでいゝ？」

「えゝ貴母さへ宜かつたら」と、母の返事如何になつた、斯うなつたら

母も厭だと云へない。

「ぢや左樣なさい、そして、ぢやアね十時までに新橋驛で待ち合はすと云ふことにしませう」

「えゝ、兩方掛持ちですね、忙しいわ」と、妙子さんの頰に美しい微笑が上つた。

「その時間頃に自動車を迎へに遣りませうか」と、お母アさん急に大きく出た。

「なアに私がお送りしますから大丈夫」と、己れは少しく身體を起した。

「いゝえ其麼にして頂かなくてもいゝんですから。折角の見頃を中途で立つて頂いては」

「まア私に任せて下さい」と、己れは孰方かと云へば活動は第二の話で

要するに少しでも妙子さんの傍にゐて若い氣分になつてゐたかつたんだから、必ず見送りますと云ふ言葉は表面では深切相に見えるが其の方が却つて私に執つては心の糧であるのだつた。

二人は出た。

電車に乘つた。

衆目はパッと射つた。

「妙子さん、貴娘人形町通り好き？」

「大好き、あすこの夜つたら銀座より美しいんですもの、そして何處となく江戸氣分が漂ふてゐるんですもの」

「私も好きです、全くあすこをブラ〳〵してゐるといゝ氣持ちになつて了ひますね、それぢや斯うしませうか、水天宮前で下りて人形町を通

つて歩きながら明治座へ行きませうか」

「えゝ」

暫らくした、二人は下りた。

オ、久振りの人形町よ、美しき哉その光!! そのあでやけき眼かさ!!

煌々たる瓦斯と電氣を浴びながら往き來う人のあの裝ひの晴れやかさ、威勢よさ。

「矢つ張り人形町だわ」と、妙子さんの眸は憧憬に輝いてゐた。

小道を折れて明治座へと行く、少し暗くなつた、妙子さんの腕は默つて私の腕の中を潜つた、互に見合はしてニッコリした、そして嬉し相に歩いた。

明治座の前はパッと明るかつた、橋から川を覗くと其の光りをうつした

水はゆら〳〵として動いてゐた。

ツカ〳〵と進むで行くと、素人らしい二人の女が帳場に座つてゐた。「西川と云つて先刻切符を頼んで置いたんだが」と云ふと「さうですか」と云ひながら側の男に此の由を告げた、男は「直吉ッ」と出方の名を呼んだ。直吉が來た。「西川さんと云ふ方の番はお前だろ」と男が云ふた。「へイ」と其方に返事して、今度は此方を向いて「さア」と小腰を屈めた。

二人は其の案内に依つて進むだ、扉を排して行くと正面のフイルムの外、どこも眞暗だ、朧ろな光を頼りに漸つと直吉の立止まつてゐる所へ來た。

「どうか此處で我慢なすつて下さい、何分遲うお申込みなものですから」

「ウン結構」と、云ひながら妙さんを好位置に座らせた。隣も右も左も

サッパリ解らない。辯士の白熱の聲に直ぐ耳を傾げて二人は物も云はずにフイルムを注視した。第三卷と云ふ字がうつゝた隙に二人は密つと握手した、それは折柄の音樂に微妙な感激が湧き立つた其の互の發露に過ぎなかつた。

明るくなつた時急に慌てゝ互は惡いことでもしてゐた樣に手を放した、そして四邊を見た、誰も知らん、誰も知らん。

己れが左程に好きでも無い活動へ斯うして遣つて來たのは一つの最大原因は確かに妙子さんと一緒であると云ふことであつたけど、一つは又二人の知つた女性が此のフイルムに現はれてゐると云ふ事を新聞で知つたからだ。

一人はT女である、一人はあの女である。

あの女！　私は其れを申し述べたい。

去年の夏であつた、S君と大磯へ行つた時に波際に淡紅色の海水浴着を着た素敵な美人がゐた。その脊の高さからスタイルのよさから最初は何うしても日本人であると首肯することが出來なかつた。漸々近づいて見ると女は日本人であつた。

「美人だねえ」と、Sは云ふた。

「素敵だナ」と、己れは答へた。そして默つて暫らく見惚れてゐた。

すると砂をいぢつてゐた其の女は恰度そこへ通りかゝつた眞裸の漁師の青年を掴まへて何やら話し出した、と突然青年は浮漂を持つて片ッ方を其の美人に握らせながら、ザンブと海へ飛び込んだ、見てゐる裡に沖へ沖へと泳いで行つた。

「あの女泳げないので賴んだんだナ」と、S君は云つた。

「屹度左様だ」と、答へながら、

「ナーあの様、ビヨン〳〵刎ねる様にしてゐる、屹度お轉婆だぜ」

「お轉婆でもあれ程の美人なら」と、S君隨喜の涙を流してゐる。

「屹度良い家庭の令孃だろ、それとも妻君か知ら」

まさか其の名を外の者に訊くことも出來ないから、何處の何者と解らぬ儘に其の夕方ステーションへ來た。ステーションで思はぬ友人にピタリと出會した。「君は？」と訊くと、「ズッと以前から大磯へ來てゐる」と云ふ、それなら斯う斯うした風情の女を知らないかと訊くと、ハテ誰だらうと暫らく小首を傾げてゐたが、何うしても見當が附かなかつたと見えて、側にゐた海水浴仲間らしいのに訊いた、すると「屹度館山の妻君

の妹だらう」と男は答へた、「ホーあの人の？」と己れは少からず驚かされた、館山とは名のみはよく知つてるが未だ逢つた事のない某畫家である。然し彼の妻君の妹としては確かに上出來だ、全で華族の姫君と云ふ顏だ、して見ると彼の妻君は妹から押して考へると美人らしい、こいつあ傑作だ。

然しそれも判然した事は云へぬと云ふので疑問の儘になつてゐた、ところが或る時偶然有樂座で彼女を見たことがあつた、矢つ張り館山君の義妹に違ひなかつた。然し其の時の樣子の生意氣さと不似合な和裝で總かり美しき幻影が醒め果てゝ了つて、S君諸共に「あんな女に一時でも參つたのは口悔しい」と洩らし合つた事がある。

その女が今フィルムに出たんだ、矢つ張り嘗て大磯で見たあの時の美觀

は爪の垢ほども浮び出なかつた、何んとなしに態とらしいキザな所が厭で〳〵堪らなかつた。

活動見物最中フと氣が附いたことは、先刻妙さんが十時に待ち合はすと云ふことを約束して家を出たんだ、然したゞ呆然汽車の時間も見ずに十時に新橋へ行つたわ、直ぐ一寸前に汽車が出て了つたわとあつては何うしても次の汽車を待つには小一時間は見なくちやならぬ、その小一時間は殆んど無意識の時間である。運よく十時に行つて十時五分位に出る列車があれば其麼旨いことは無いが左樣は間屋は下ろさぬ。

そこで何うしても旅行案内を見て一應時間を知つて置く必要がある、所が情けない哉明治座の附近に本屋が無い、困つたナと思ひつゝフと氣が附いたのは私の知合の本屋である、それは人形町を少し外れた場所に

ある、そこへ己れの名を云つたら大急ぎ持つて來て呉れるに違ひなかつたので、そのフィルムが終るや否や、直ぐ電話をかけ依頼した、暫らくすると小僧が自轉車に乘つて息セキ持つて來た。

調べて見ると九時廿分頃と、十時四十分と云ふのがあつて、十時四十分が最終だ、そこで妙子さんに十時四十分にしたら何うだ、一應家へ電話を掛けたらと注意した。妙子さんは折柄恰度見てゐたフィルムの結果が何うなるか〳〵とハラ〳〵してゐた矢先だから、少つとでも長くゐたい爲め、急いで立上がつて行つた、程なく座席へ戻つて來た。

「何うでした？」と、小さい聲で訊いた。

「左樣申しました所、恰度今客があるので、何うしても十時四十分より早く立てませんと申してました、い〵鹽梅でした」と囁く樣に云つた。

先づ好都合、「よかつた、よかつた」と云ひながら二人は又手を握つた。感興は次第に乘つて來た、二人は暫らく夢中に見惚れてゐた。益々興が加はつた、時間を見るともう行かなくちやならなかつた。

「妙子さん、時間だよ」

「え？　でもう少し」

五分待つた。

「妙子さん時間だよ」と、再び云つた。

「モ、一、一寸だけ」

二分待つた。

「さア」と、斷然として己れは立つた。

「ハイ」と、フィルムから眼を放さず、妙子さんも續いて立つた。

「本當に惜しいわ、之れからが」

「でも仕方がない、時間が時間だから」と、表へ到頭出て了つた。

己れは孰方かと云へば大分時間の餘裕を見てゐた、だから直ぐ其處から電車に乘つて新橋へ行つて了ふには少々早過ぎるのだ。私は二人でもう少し歩くことを欲してゐたのだ。

「ねえ妙子さん、少し歩きませう」

「えゝ」と、彼女とて否まなかつた。

二人は肇て人形町を横切つて薄暗い道を腕を抱えながら日本橋の方へと歩を運むだ、戸を閉めかけてゐた其處等の店員は羨し相に見てゐた、湯から歸りかけらしい三四人は多數を頼んで通り過ぎた後から「ホッ」「お仲のいゝ」などゝ浴せた、此方は齒牙にもかけやしない。

いつしか日本橋へ來た、あまり明るかつたので私は惜し相にしながら、暖かい妙子さんの手を放して了つた。

白木屋前から市街自動車に乘つた、少々時間が氣がゝりになつて電車ではと思はれたからだ。

新橋ステーションには既に二等待合室に母が待つてゐた。

「オー」と、此方の姿を見ると直ぐ立上つて遣つて來た。

「御心配でしたか」

「もう來るのか、もう來るのかと可成氣をもみましたよ、でも未だ十分あります、さ何卒此方へ」と、素の場所へ案内をする。二人は其の空席に腰かけた。

母にはトンビを來た若い學生の連れがあつた、妙子さんは其れと挨拶し

た。それが濟むとお母アさんは「一寸御紹介申上げます」と云つて其の男と共に私の前へ來て立つた。

「この方は恰度今夜お遊びにゐらした帝大の方です、植村正輝と仰しやるんです、どうぞ宜しく。……此方は他見男さん」

青年は懇ろに挨拶した「先生の御本でお名前は」と又お定りが出た「やア」と云ひながら早くも其の言葉は拂ひ退げて了ふ、そして再び座つた。

その裡時間が來た、一同は立ち上がつた。その青年も私と同じく新大久保まで山ノ手線で行くんだと云ふ、先づはいゝ連れが出來たと己れは喜んだ。

汽車で品川まで妙さん親子を見送り、直ちに山ノ手に乘換へた。

其の學生と樣々の話が出た。

「一體何しに行くのだらう、今頃小田原まであの人達は」と、知つてゐながらも、たゞ話の繼穗の爲めに斯う呟やくと、

「オヤ先生御存じないんですか」

「知らない」

「只今お話した石尾と云ふ妙子さんを戀ひ慕つてるあの中學生の家の別莊に行くのですよ」

「え？　その男の別莊へ？」と、己れは驚いて了つて、

「然し私には斯う云つてたよ」と、己れは兄が保養云々と妙子さんの部室云々のことを述べた。

「そりや胡麻化してゐるんですよ、氣極り惡くて云ひ出せないんですよ、まだ先生には隱し立てしてゐると見えますね。私しには先刻家で母親が

確かに左様云つてました、又考へて見たつて自分の家を此の季節に小田原なんかへ借りる必要もなし、又家を借りると云ふ事が急に是非今夜行かなくちやならぬと云ふセツバ詰つた問題でもないぢやありませんか」

如何にも云はれて見れば確かに左様だ、旨く己れを操つたものと見える、己れもウカ〳〵それを信じてゐると思へば、お人が好過ぎたにも程がある。

「それで先生、私の考へでは石尾と云ふ其の中學生が屹度一人で別莊へ出かけてゐるんですよ、そして電報を打つたんですよ、あの母つたら娘以上に此の話に熱心なんですよ、だから御覽なさい、自ら進んで娘を連れて出かけたぢやありませんか」

「イヤ其麼具合に私は聽かなかつたが。母は二人のことには反對だと云

ふことの樣に聽いてゐたよ」

「何うして先生、近頃は母の方が躍氣になつてゐるんですよ、若し左樣で無かつたら母が今日位寧ろ小田原行を止めるのが普通ぢやありませんか」

如何にも道理ある言分だ。

「フーム、そして一體先方には一人丈けしか居ないんだらうか」

「いゝや、そりや番人か何んか居るでせう」

「そこへ行つて泊るんだらうか」

「左樣ですとも！」

「變だナ」

「イヤまさかと云ふこともありますまいけど、その熱心さが何うです、

私はあの母娘の氣が知れないんです、喰へませんよ、それは〳〵二人共喰へませんよ、妙さんなんかテンデ私共を眼中に置いてゐないんですもの」と、盛んに二人を罵倒した。

私は何が何やら狐につまゝれた様な氣持ちがした、孰方の言葉を信じていゝやら、斯うなると迷はざるを得ぬ。どれ今度妙子さんに面と向つて己れが直接に肉迫して訊いて見よう、その上での判斷に任かすより外はない。若し然し妙子さんが飽く迄も其の中學生に自分の方からも熱愛の情を捧げてゐるものとすれば、いかに私と彼女は友達氣分だとは云へ一寸妬ましき氣も湧く、友達も友達全然愛と云ふものが無い友達と云ふものもこりや少々物足らぬて。戀はしなくても戀に近い丈けの情調を味はいたいのだ學生は色々と彼女のこと、彼女の一家のことに就いて自分の

知れる限りを私の前へ披瀝した、それは皆先方に悉く旗色のよく無いことのみであつた、私は唯フム〳〵と訊いた。

新大久保で二人は別れた、夜色は濃かつた。

○

翌日四谷にゐた妙子さんの友達であり、又私の奇しき知合である高子さんから手紙が來た。

「御丈夫？　私ちつとも苦しい日が無いんですけど、頭痛位は仕方がありませんわね。私ね毎日忙がしくて困つてゐるの、つく〳〵體が二つ欲しいつて言葉を感じますのよ。私ねお手紙書き出した用事は私し本當に嬉しいお話をしたいの。

あのね、マニキュアーのお道具ね、あれ毎日使つてるのよ、そしてね私

其の度毎に色んな事を思ひ出すの、あれには貴方の匂ひがうつゝてゐる様な氣がしてあれを使ふ度に嬉しい氣になるんですのよ。

本當に私しいゝものを戴いてよかつたと思ひましたわ。私ね之れ丈け申上げたかつたのでお手紙を書きました。この手紙は今日か明日かに見て下さいますでせう、お差支へが無かつたら、金曜日の晩七時に日比谷の松本樓の食堂へゐらつしやらなくつて？　いかゞ、お返事が無ければ私し參ります、お差支へがあつたら御電報か速達下さいましな。では之れで。

今度お逢ひする時美しくお化粧してゐますわ。ではいゝ日をお持ち遊ばせな。

己れは高子さんから手紙を受取つたのは之れが始めてゞある、何んと云

ふ優しい女性ちしい文字であらう、殊に最後に「ではいゝ日をお持ち遊ばせな」と止めを綺麗に刺した鮮かさ、暫らく感心して見詰めてゐた。何んだかそして急に返事も書きたくなつたし、それに妙子さんの事も彼の女は何う觀察してゐるかも知りたかつたので、早速筆を執つた。（マキユウムは過日彼女に贈つたブレスンドである）。

「やア暫らく、君は本當にしほらしい文句を書く、感心した、さて外でもないが、是非君を驚喜さすことが出來たんだ、君は其れを聽いたら屹度、「え？　まア、まア」と「まア」を繰返すに違ひないのだ。兎に角急いで逢ひたいな、金曜日と云はず今夜六時までにガオエナショナルまで來て呉れないか時間は飽く迄も勵行だぞ」

斯う書いて四谷の彼女の家へ速達を出した、彼女は屹度私の驚喜すること

とて何んだらうと考へたに違ひない、種を明かすと存外詰らぬものだから、私は態と彼女の好奇心を唆る爲めに斯くの如くした、果して、約束の時間に待つ間もなく彼女は遣つて來た、美しい化粧振りである。彼女はニッと笑むで近付いて來た。

「よく速達が間に合つたね」

「えゝ、もう一寸で出かけようとしてゐたのよ、でも宜かつたわ」

「ねえ君」

「え？」

「君は實際うまい手紙を書くね、感心したよ、隨分男の心を掴む呼吸を知つてゐると見えてお手に入つたものだよ」

「そんなに感動なすつて？」

「すつかり參つたよ、感じが非常に柔かいよ、君と云ふ人間の通りだ」

「オホッ」と、嬉し相。

「なアに？　驚喜すべきことつて？」

「何んだらう？」

「何んだらうつて、お手紙にあつたぢやありませんか、早く仰しやつて頂戴な」

「實はね」

「え」

「この間妙な人と友達になつたよ、いやそれよりも先づいささつを話すから、君はそれで誰であるかを判斷したまへ、いゝか、よく聞けよ」と云ひながら、帝劇の前で突然雨に逢つて困つてたことから、或女の傘の

中へ入つたこと、その翌日も又その翌日も逢つて其の裡夏の鎌倉の話の出たこと、鎌倉で斯々した事情で高子さんと云ふ人を知合になつた所まで話すると、先刻からヂッと聽いてゐた高子さんは突然、

「妙子さんでせう、妙子さんに違ひないわ」と、大きく叫んだ。

「ねえ左様でせう？」

「左様だ」

「まア不思議ねえ、奇遇だわねえ。先方も驚いてゐたでせう、私と貴方と知合だと聽いた時、

矢つ張りまア——と飛び上がつてたでせう？」

「それ所か君と僕と知合になつた動機を話した所、矢つ張り君の今の様に奇遇だわねえーと飛び上がつてたよ。一體あの女學生は何麼女だい、

それを君の見た所を聽きたいと思ふんだ？」

「兎に角贈物をすると大變喜ぶ人よ、だから貴方が若し仲善くなりたいとお思ひでしたら、何か買つて上げたらいゝことよ」

「何がいゝだらう？」

「左様ね」と、一寸小首を傾げて、

「伊東屋のレッタペーバーどう？」

「贈つたよ、先日二人で散歩してゐた時買つたよ」

「まア早いわねえ、喜んでゐたでせう？」

「如何にも君の云ふことが當る」と、己れは其の時の彼女の表情を思ひ浮べて云つた。

「あの人にね、私し面白いことをしたの？」

「？」
「戀をさせて上げようとしたの？」
「フ？」
「私の從弟があの頃來てゐたの、だから二人が戀仲になればいゝ〳〵と思ふて態と二人限りで散歩に出したり色々試みたの、でもあの女は熱が無いんですよ、それに男の方も石部金吉でね、ちつとも感じないの、駄目だつたわ」
「何んだか其麼樣な話をしてゐたつけ」
「してましたか、ぢや石尾さんの坊ちやんのこと御存じ？」
「中學生？」
「知つてるのね、大變なんですよ、もう二人は夢中になつてゐるんです

よ、夢中どころか」
「ぢや女は許したでせうか」
「そりや無いわ、無いでせうと思ひますけど」
「無いだらう、どうも其麼樣子は見えない」
「大變なんですつて。……お母樣にお逢ひになりましたか」
「逢ひました」
「どうお感じになつて？」
「さア思ふたより……」
あとを云はなかつた。
「云はない方がいゝわねえ」と、彼女も口をつぐむだ。
「あの妙子さんはお母アさんの事を小母さんと呼んでゐるでせう？」